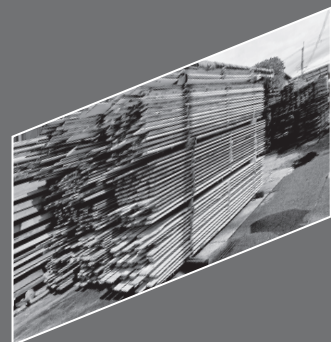


モンタージュ的改築論

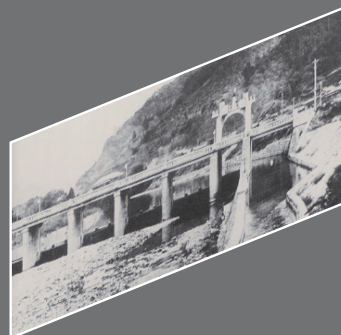
吉野貯木地域の歴史・記憶を蓄積する製材所再編



棧積み



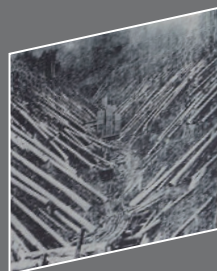
飯貝竹とんど



材木橋と水門



原木の筏流し

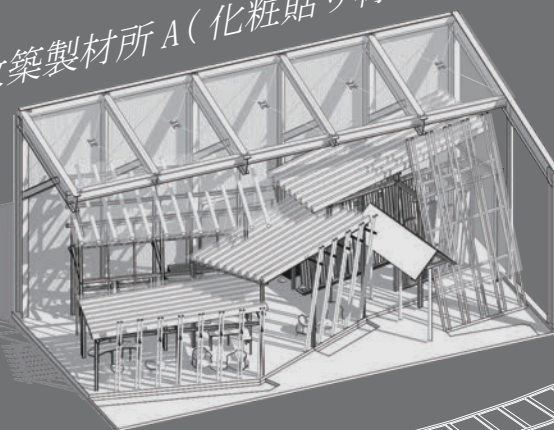


葉枯らし

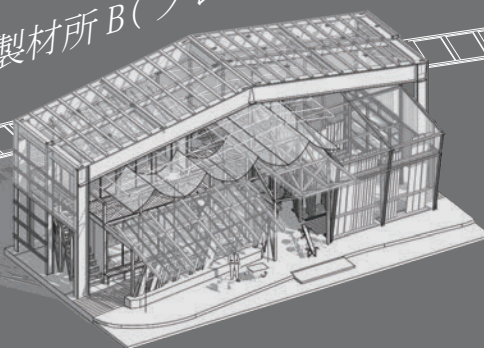


登り切り

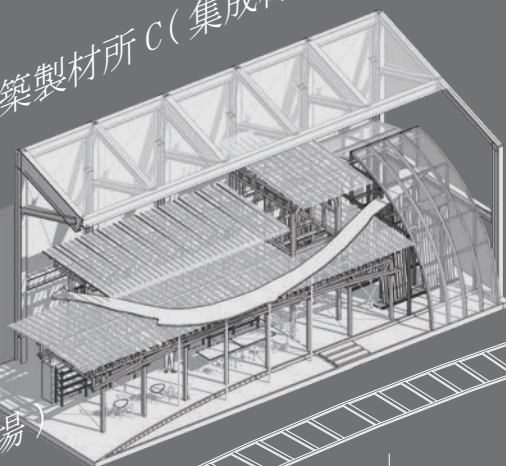
改築製材所 A (化粧貼り材工場)



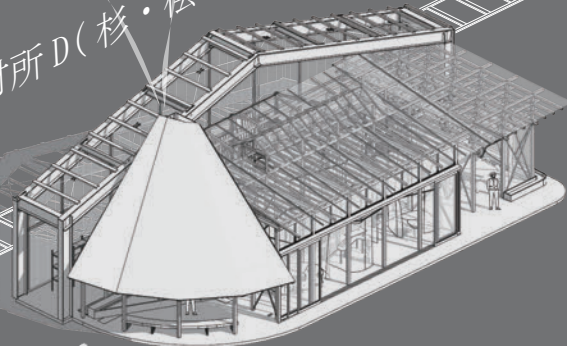
改築製材所 B (プレナー加工工場)



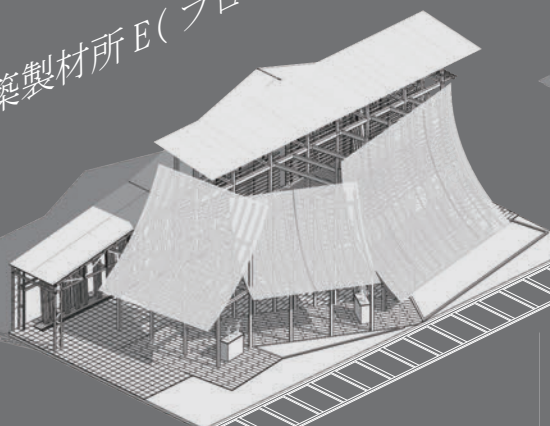
改築製材所 C (集成材工場)



改築製材所 D (杉・桧オイル工場)



改築製材所 E (フローリング製材工場)



旧木材引き込み線跡



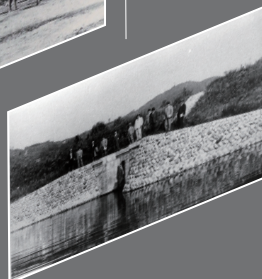
山岳信仰



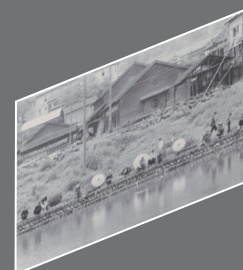
柴燈大護摩供



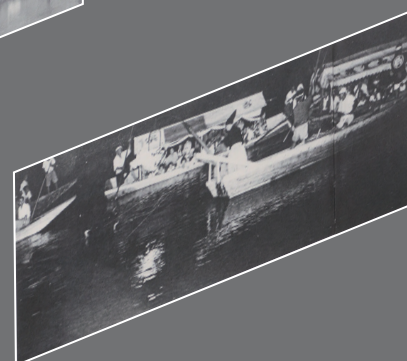
貯木池底固め



貯木池注水口



貯木池での釣り



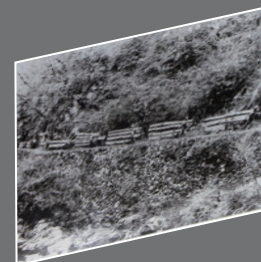
吉野川の鵜飼い



鮎取りの簀



修羅出し



木馬出し



日本最古の製材団地である吉野貯木

貯木場開設から 85 年が経過し

製材という機能を第一に発展してきた町は

製材業が衰退の一途を辿る今、町の歴史・

記憶までも失われつつある。

本提案では自身が撮影した写真や古写真

として記録された貯木地域に関する風景を

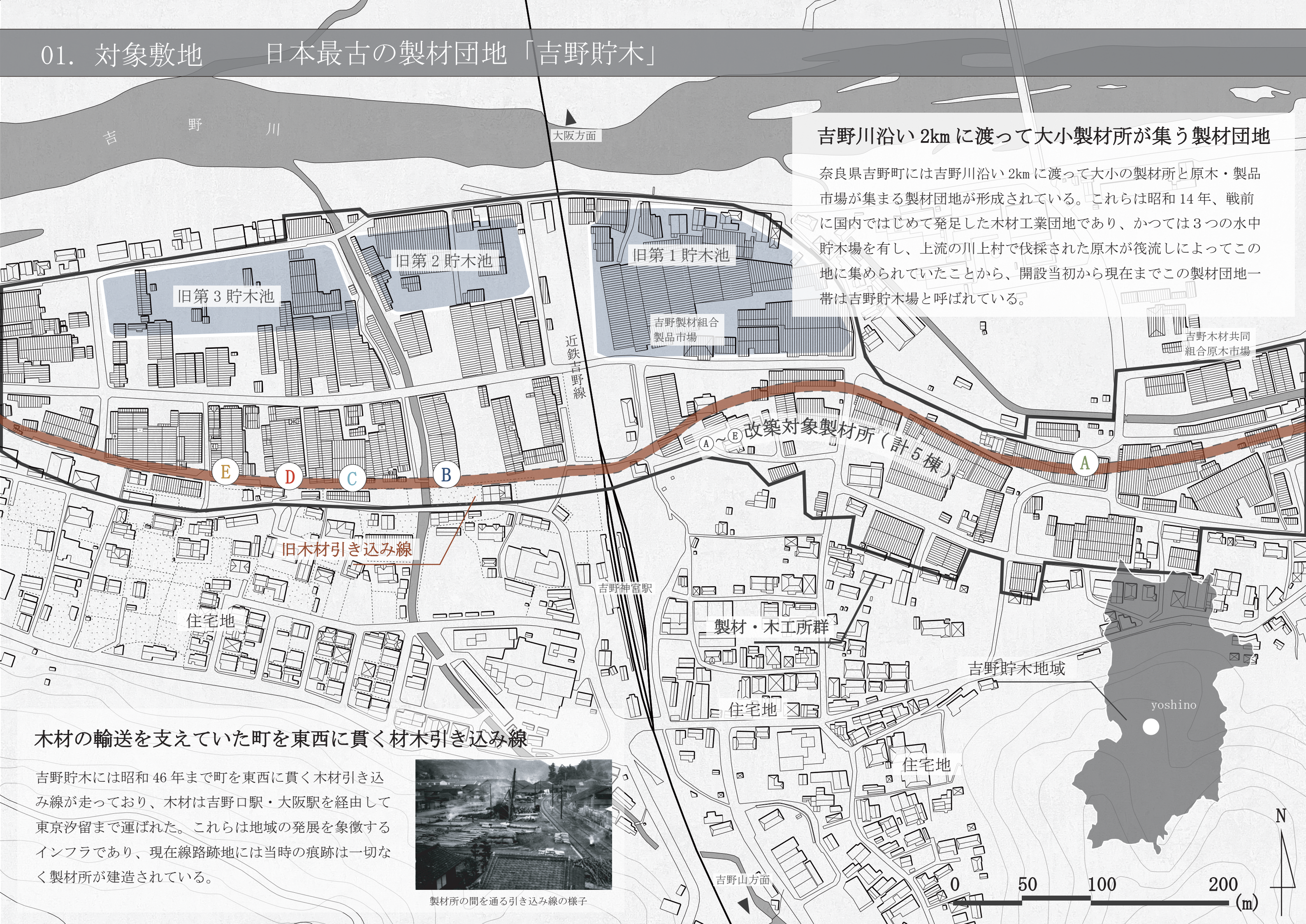
手がかりに、この町が歩んできた歴史・記憶

を蓄積する製材所の再編を行っていく。

01. 対象敷地 日本最古の製材団地「吉野貯木」

吉野川沿い 2km に渡って大小製材所が集う製材団地

奈良県吉野町には吉野川沿い 2km に渡って大小の製材所と原木・製品市場が集まる製材団地が形成されている。これらは昭和 14 年、戦前に国内ではじめて発足した木材工業団地であり、かつては 3 つの水中貯木場を有し、上流の川上村で伐採された原木が筏流しによってこの地を集められていたことから、開設当初から現在までこの製材団地一帯は吉野貯木場と呼ばれている。



木材の輸送を支えていた町を東西に貫く材木引き込み線

吉野貯木には昭和 46 年まで町を東西に貫く木材引き込み線が走っており、木材は吉野口駅・大阪駅を經由して東京汐留まで運ばれた。これらは地域の発展を象徴するインフラであり、現在線路跡地には当時の痕跡は一切なく製材所が建造されている。

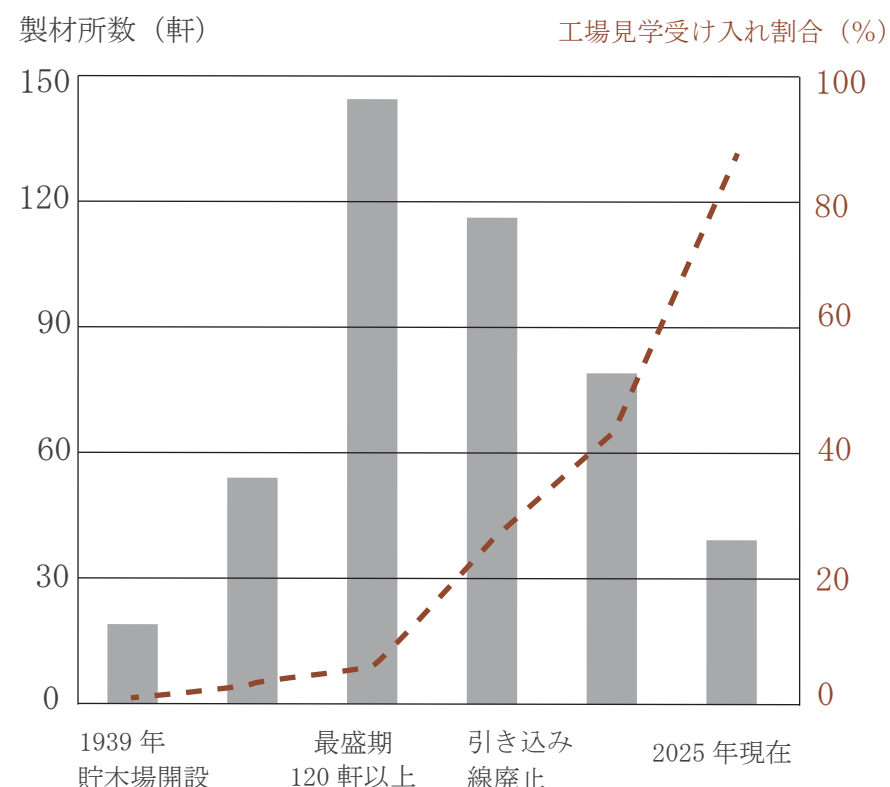


製材所の間を通る引き込み線の様子

I 最盛期の1/4まで減少し、オープンなスタンスへと変化しつつある製材所

貯木場開設から約85年の歳月を経た今、最盛期に120軒以上あった製材所は担い手不足や材価の下落により、現在は34社まで減少している。

そういった逆境から抜け出し、吉野材や地域の魅力を発信するため、現存している製材所34社のうち30社（約9割）が常に工場見学を受け入れており、**外部に対してオープンなスタンスの製材所が近年急速に増加しつつある。**



吉野貯木内製材所数の推移と工場見学受け入れ割合の推移
(※ 吉野町史下巻・聞き取り調査等により作成)

II 歴史文化・魅力を伝えていこうという町全体の強い意識

地域では林業・製材所・木工所などの地元有志による会「吉野と暮らす会」が2012年に発足。地域の歴史を伝承する活動や、吉野材の認知度の上昇を目指し町歩きイベントやオープンファクトリーなどが毎年定期的に行われている。

以上のことから分かるように、近年貯木地域の**製材関係者の意識は外部に対して積極的に開く傾向がみられる。**



地元有志によって結成された「吉野と暮らす会」



貯木町歩き



空き工場ワークショップ



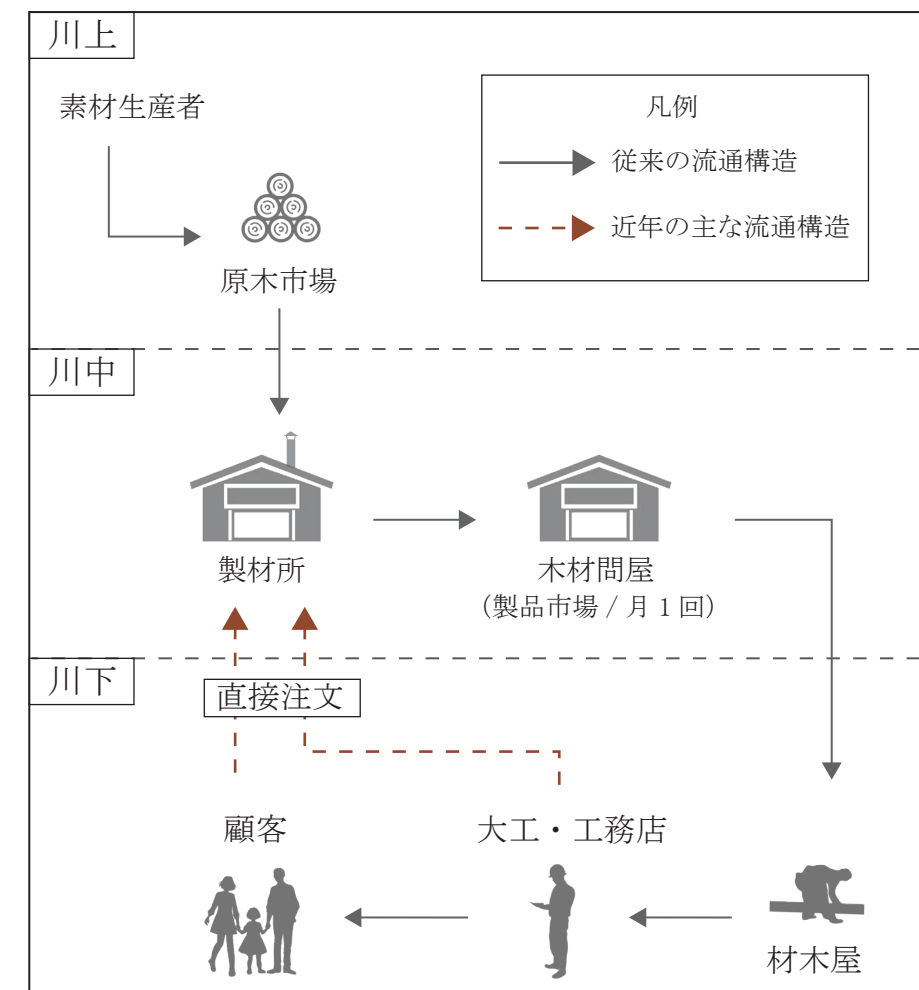
吉野ウッドフェス



過去5年間で
10以上の
イベントの開催

貯木地域で毎年行われているイベントの様子

III 新たな木材流通形態による必要機能の増加

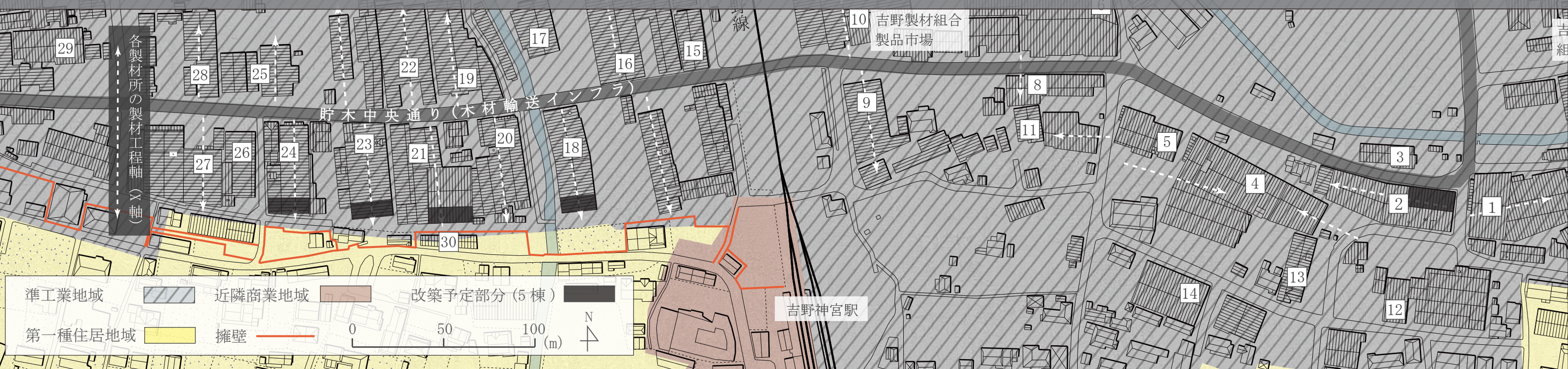


吉野貯木内における近年の木材流通構造
(※ 地域誌・聞き取り調査等により作成)

近年では工務店・顧客による製材所への直接発注の増加により、納期が短くなりつつある。そのため様々な注文に短い納期に対応できるよう半製品在庫のストック場や天然乾燥場の確保、注文の間口を広げるため常設的な製品市の機能などが必要とされており、町の製材所は**現在の変化しつつある流通の仕組みに対応した、形への変革を求められつつある。**

03. フィールドワーク①

貯木地域内の製材所や町の構成についての現状調査



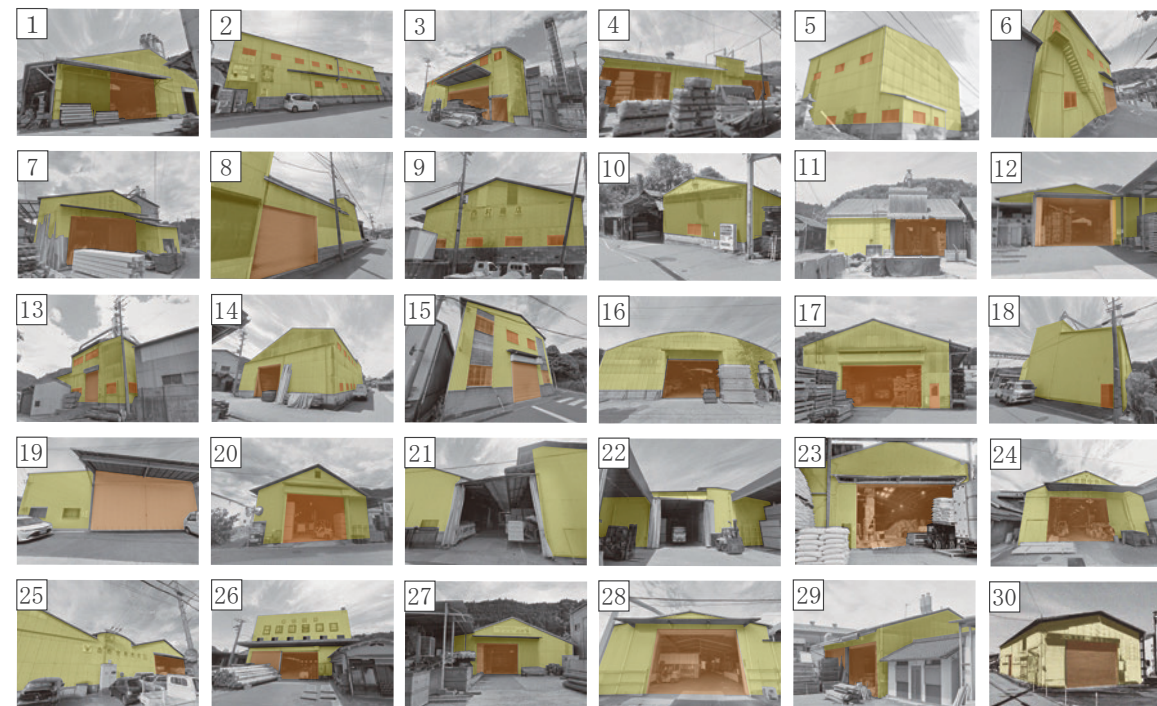
ミクロ的（各製材所）問題

【時間的変化・場所性・周期性の欠如】

貯木地域の製材所は基本的にその機能的特性からファサードはスレートで覆われており、開口はごくわずかしき設けられていない場合が多い。

そのため建物内の様子は外部からほとんど見えず外部からの来訪者たちに対して固く閉ざされている。

これらの施設は周辺環境から隔離されそれぞれが強い独立性（孤立性）を持っている。



主要道路から見た各製材所のファサードの様子
(スレート・その他金属葺き部分 開口部分)

マクロ的（吉野貯木全体）問題

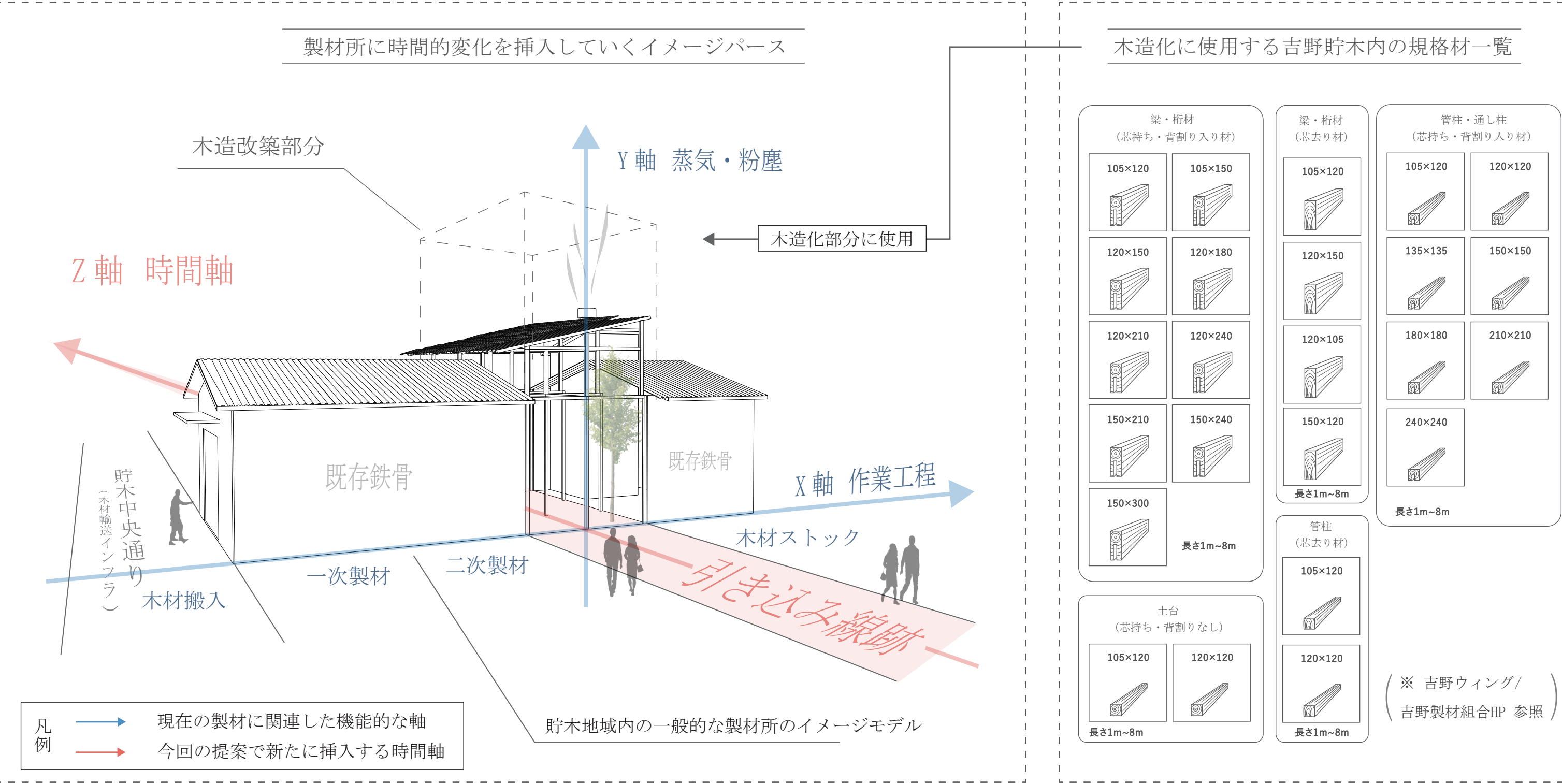
【製材を主とした機能的なゾーニング】

町は住居エリア・商業エリア・工業エリアに明確に分離されている。そして工場地帯においては木材輸送のためのインフラ(道路)とそれに従属する相互に隔離された製材所が立ち並ぶ均質的な風景が広がっている。



スレートで覆われた製材所が立ち並ぶ均質的な風景

以上のように外部に対して開いていこうという製材関係者の意識と町の現状は大きく乖離している。



05. フィールドワーク② 吉野林業・吉野貯木に対峙する人々の生活を見る

吉野の山・原木市場・製材所等の現地調査写真

A



B



C



D



凡例

A段： 吉野で11代に渡って山を管理されている山守さんと山へ入った様子

B段： 製材所への現地調査
貯木街歩きイベントへの参加

C段： 吉野貯木地域の日常の一コマ。

D段： 原木・製品市場での競りの様子

様々な方へのヒアリングや地域誌から得られた声

山守(素材生産者)

「木はむやみに切らず、切るからには最後まで大切に使ってほしい」

「山守がいなくなった山から放置林となってしまっている」

「昔より山の価値が下がり、山への関心が薄れ山を次ぐ人が大幅に減少している」

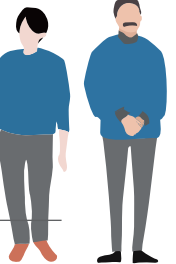


製材関係者

「貯木地域が観光で賑わって何か買って帰ってくれたら喜ぶ」

「観光で来て、気に入って、移住する人がいてもええと思う」

「街歩きイベントを定期的で開催するのではなく、毎日が街歩きの日にしていきたい」



地域住民

「吉野神宮駅から貯木場へ貨車の引き込み線が走ってましてな、製材した木を貨車に積み込んで出荷しとった」

「貯木家のなごりと言ったら石垣や水門跡などが少し残っているだけですわ」

「貯木池では、泳いだ、泳いだ浮かんでいる丸太にも乗ったよ」

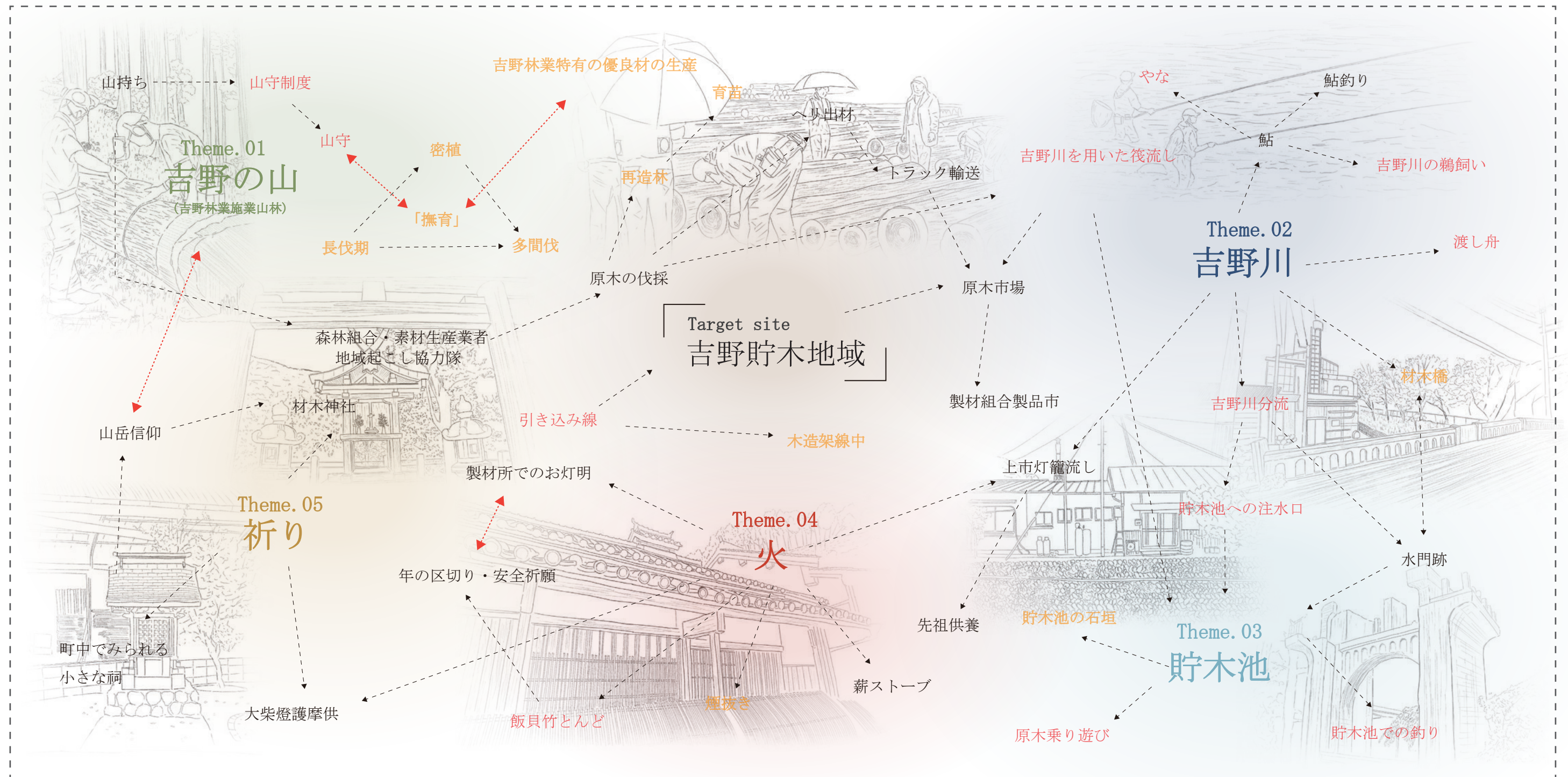


(※ 森林組合・製材所・山守・地域住民へのヒアリング/町誌等により作成)

現地調査では現地に何度も足を運び吉野の林業に関する様々な体験をすると同時に山を代々管理する山守さん・森林組合・奈良県フォレスター製材関係者・地域の飲食店・地域住民などに広くヒアリングを行うことで、吉野林業に対峙する人々の生活を客観的に観察することに努めた。

06. フィールドワーク② 大きな連関の中に位置する吉野貯木

貯木地域に関する風景のスケッチとコンテキスト同士の関連性を可視化した環境連関図



吉野林業や貯木地域の人々の生活を調査する中で、この町の生活は背後にある山々や付近を流れる吉野川など大きな連関の中に位置しており、決してこの町のみでは完結しておらず今日まで多くの歴史の蓄積があることを強く感じた。そうして連関図を作成する過程で、その中でも特に地域の記憶・風景と深く結びついている5つの要素を発見した。

I 時間・空間を越えた表現を可能にする映画技法”モンタージュ”

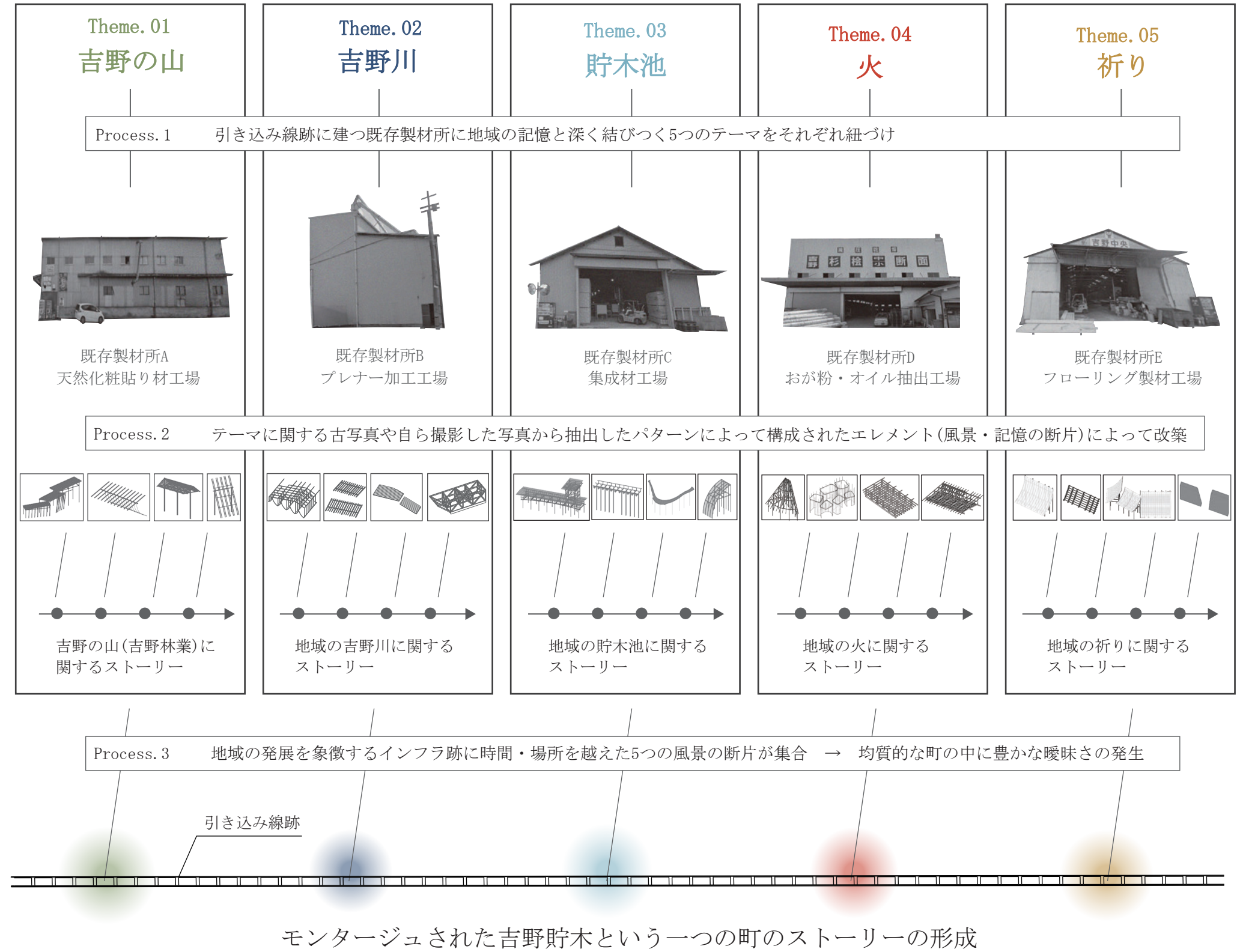


モンタージュ技術は20世紀初頭にロシアの映画製作者たちによって発展した映画技法である。

複数の映像や写真の断片を組み合わせることで、一つの連続したシーンを作ること、時間・空間・意味の連続性を越えた表現を創出することが特徴的な手法である。

II 本提案で行う”建築的モンタージュ”について

本体案では吉野貯木や吉野林業地を調査した第三者である私が場所・時代を越えた、この地域に深く関連する風景を元に構成したエレメントを既存製材所に挿入する形で改築(モンタージュ的改築)を行っていく。それにより**地域社会が共有する歴史・記憶を可視化すると同時に町に豊かな曖昧性を生み出し現在の独立性の強い製材所が立ち並ぶ均質的な風景を打破からの脱却を目指す**



各製材所内というミクロ的な視点で発生するモンタージュ

吉野貯木(1つの町)というマクロ的な視点で発生するモンタージュ

既存製材所 A（天然化粧貼り材工場）

× 吉野の山々

室町時代から 500 年以上に
渡って営まれてきた
吉野林業

何世代にも渡って山林の
手入れを行い、日々
感謝と畏敬の念
を持って山と対峙する人々。

山で働く人が著しく減る
中、連綿と受け継がれて
きた風景は少しずつ失わ
れつつある。

そんな今だからこそ、
吉野の山で生きる人々
の風景を建築に内包する

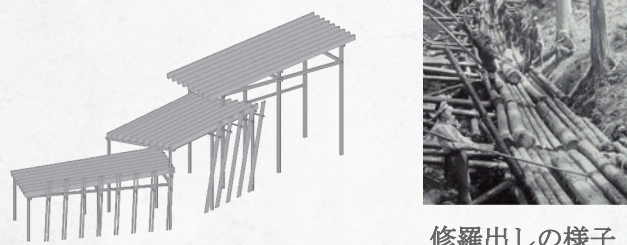


08. 製材所 A | アイソメ構成パース

isometric drawing

「吉野の山」の風景から抽出したエレメント一覧

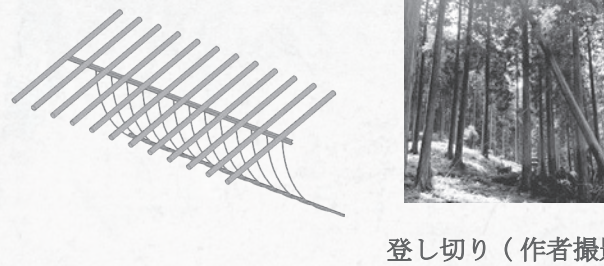
架構 A-1 / 修羅出し



修羅出しの様子

吉野林業では伐採地点から土場までの遠く険しい道のりの中、数多くの杉・桧を運搬する際には丸太で滑り道（修羅）を作成し、その上を滑らせて搬出することが多かった。今回は丸太を平行に配置したものを連続させた架構に斜材を組み合わせてることによって当時の修羅出しの風景を表現する。

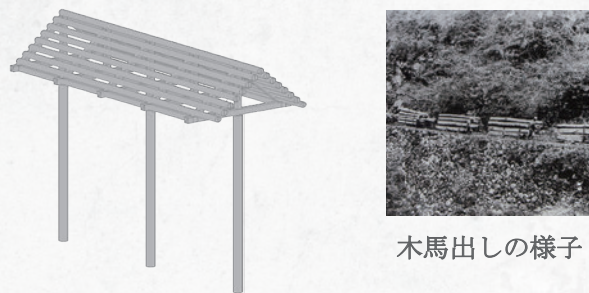
架構 A-2 / 登し切り



登し切り（作者撮影）

吉野林業では木を伐採する際に、ロープで固定し枝葉が山の頂上側になるよう倒すのが伝統的な倒木方法である。これは後に木材を乾燥させる際に有利になるためである。丸太を斜めに組んだ加工に紐を結びつけることで、現在も行われている登し切りの風景を表現する。

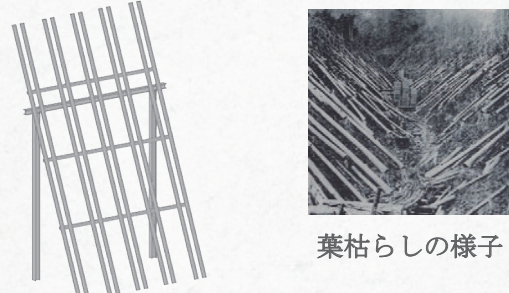
架構 A-3 / 木馬出し



木馬出しの様子

伐採地点から土場まで材を運び出す方法として修羅出しの他に、盤木を並べて整備した木馬道の上を木製のそり滑らせることによって搬出する木馬出しという方法があった。等間隔に並べた材の上に丸太を三角形に積み上げることにより、木馬の盤木と輸送する丸太を表現した。

架構 A-4 / 葉枯らし

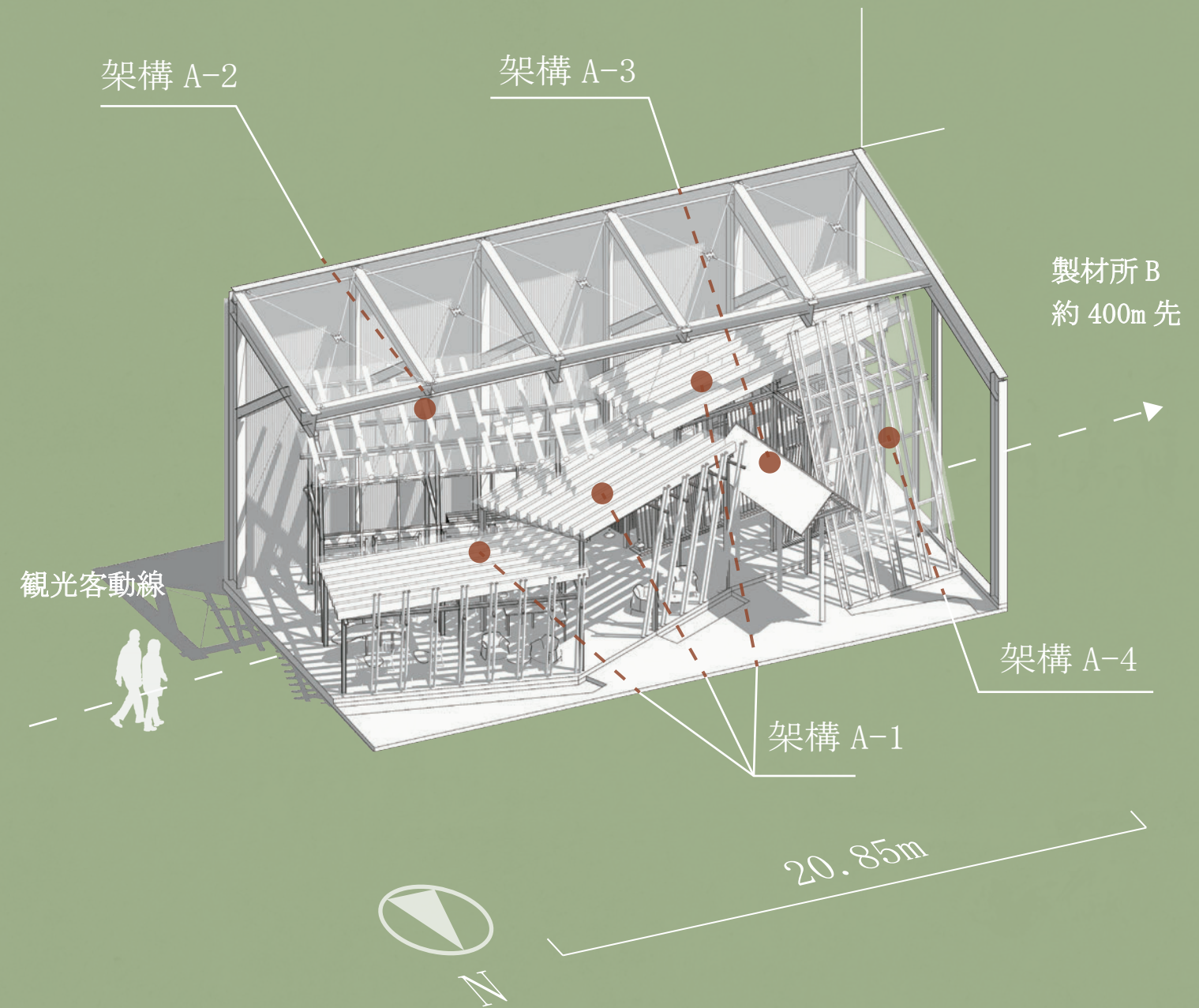


葉枯らしの様子

吉野林業では枝葉を頂上側に向けて倒木した後そのまま約半年～1年の間その場に放置する葉枯らしと呼ばれる工程が行われる。伐採直後の木材は水分を多く含んでいるため、枝葉を通して水分を蒸散させるためである。丸太を架構に立てかけ斜材とすることで葉枯らしの風景を表現する。

※架構の番号は観光客が実際に目にする順番と連動

製材所 A 詳細アイソメ図



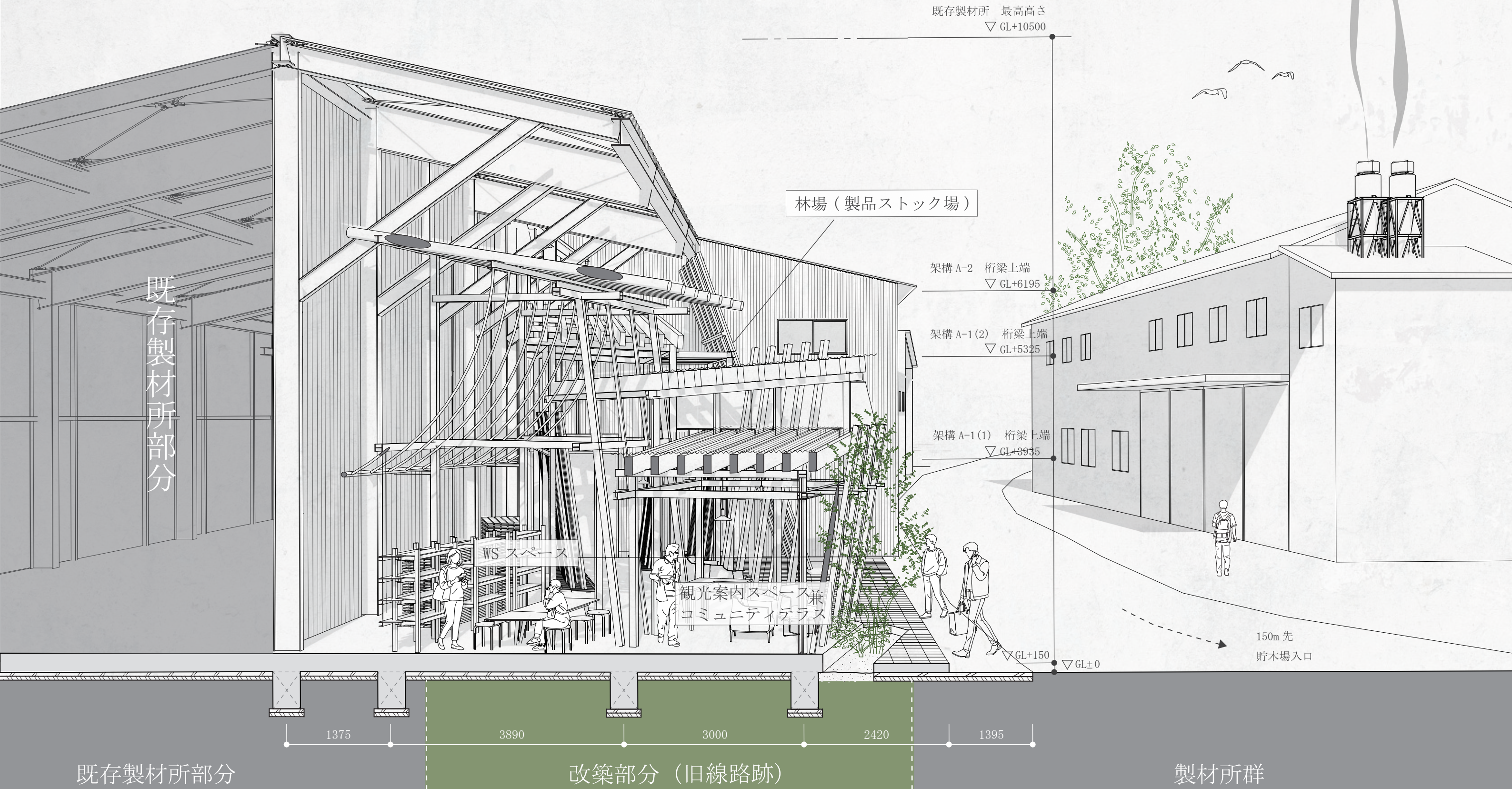
製材所 A アイソメ配置図

貯木の玄関口に位置する、地域に開かれた製材所

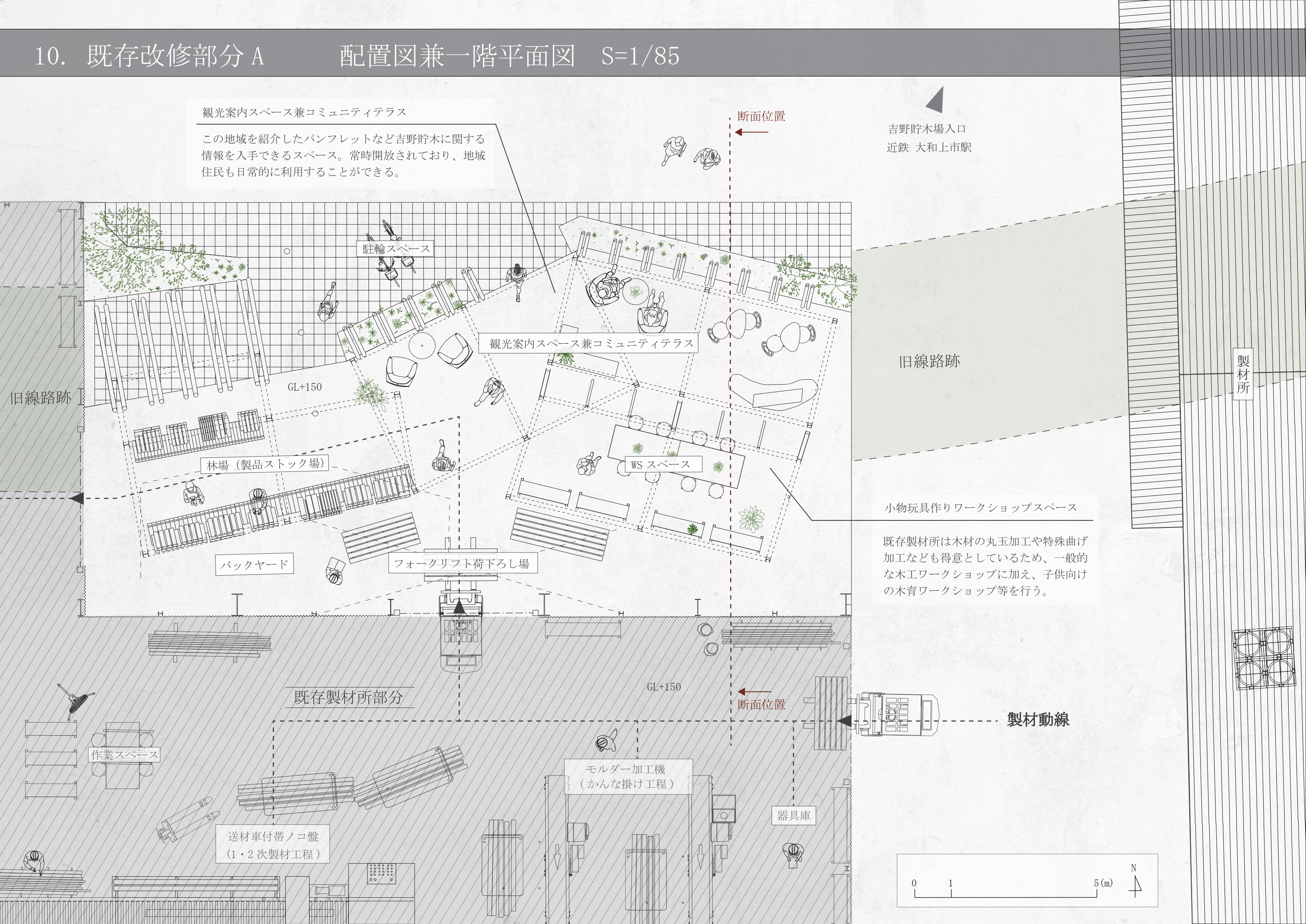
外部から来た人たちが吉野貯木場を訪れるとまず目に入るのがこの製材所 A である。改築前のファサードはほぼ前面がスレートで覆われており開口も少なく、外部からの来訪者に対して排他的な雰囲気を持っていた。そこで今回は既存製材所の機能に支障が出ない程度に減築を行うとともに、製材後の木材を立てかけて保存する林場など、危険性が少ない製材工程を町に連続して配置した。

人々の営みが作り出す重層的なファサード

吉野の山で営まれてきた風景を元に形成された架構の下では、木材加工のワークショップに参加する観光客や林場で一本一本真剣に製品を管理する製材関係者など多様な人々による様々なアクティビティが同時に発生する。そういった人々の営みは町へと滲みだすと同時に、新たな吉野貯木の玄関口の風景を形成する。



10. 既存改修部分 A 配置図兼一階平面図 S=1/85



既存製材所B（プレナー加工工場）

× 吉野川

古くから風光明媚な景観を誇る川として、数多く
万葉の歌
に詠まれてきた吉野川。

山から材を切り出し搬出する筏流しや鮎を取るための鵜飼いや漁など、そこには吉野独自の
多様な風景
が存在していた。

そんな地域の恵みの象徴である吉野川の風景を内包する。

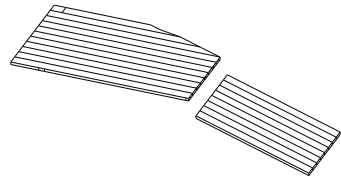


11. 製材所 B | アイソメ構成パース

isometric drawing

「吉野川」の風景から抽出したエレメント一覧

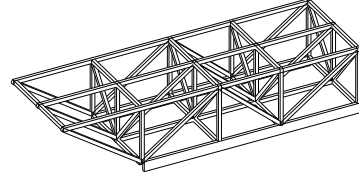
床仕上げ B-1 / 筏流し



筏流しの様子

吉野の筏流しは江戸時代から始まり、トラック輸送が発達する昭和初期にまで行われていた。地域一帯では「吉野筏流し歌」などの民謡も生まれるなどこの象徴する風景であった。今回は観光客の動線上の床仕上げとして平行な木材を連続して配置することで、当時の風景を表現する。

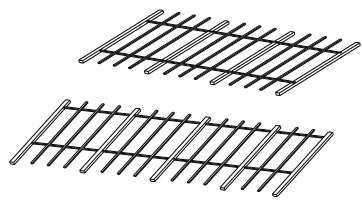
架構 B-2 吉野川の鵜飼い船



吉野川の鵜飼い

吉野川では、神武天皇の時代から鵜飼が行われていたという歴史があり、『古事記』や『万葉集』にもその記録が残っている。木造の鉛直材付ワーレントラスにより吉野川に浮かぶ鵜飼い船の形状を表現する。

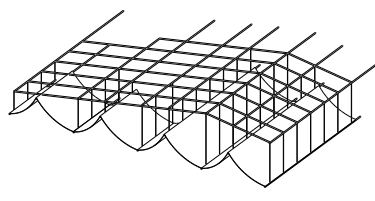
架構 B-3 / 夏の風物詩 築



吉野川に架けられた築

吉野ではかつて石や竹などでせき止めて、川の流れを集め、そこにアシや竹を荒く編んだ「すだれ」のようなものを置いて、川を下る魚を獲る伝統漁法の「築」が行われていた。これは地域の夏の風物詩であった。今回は二段階の緩やかな勾配の屋根により、吉野川に敷かれた築の風景を表現する。

架構 B-4 / 吉野川の遊船

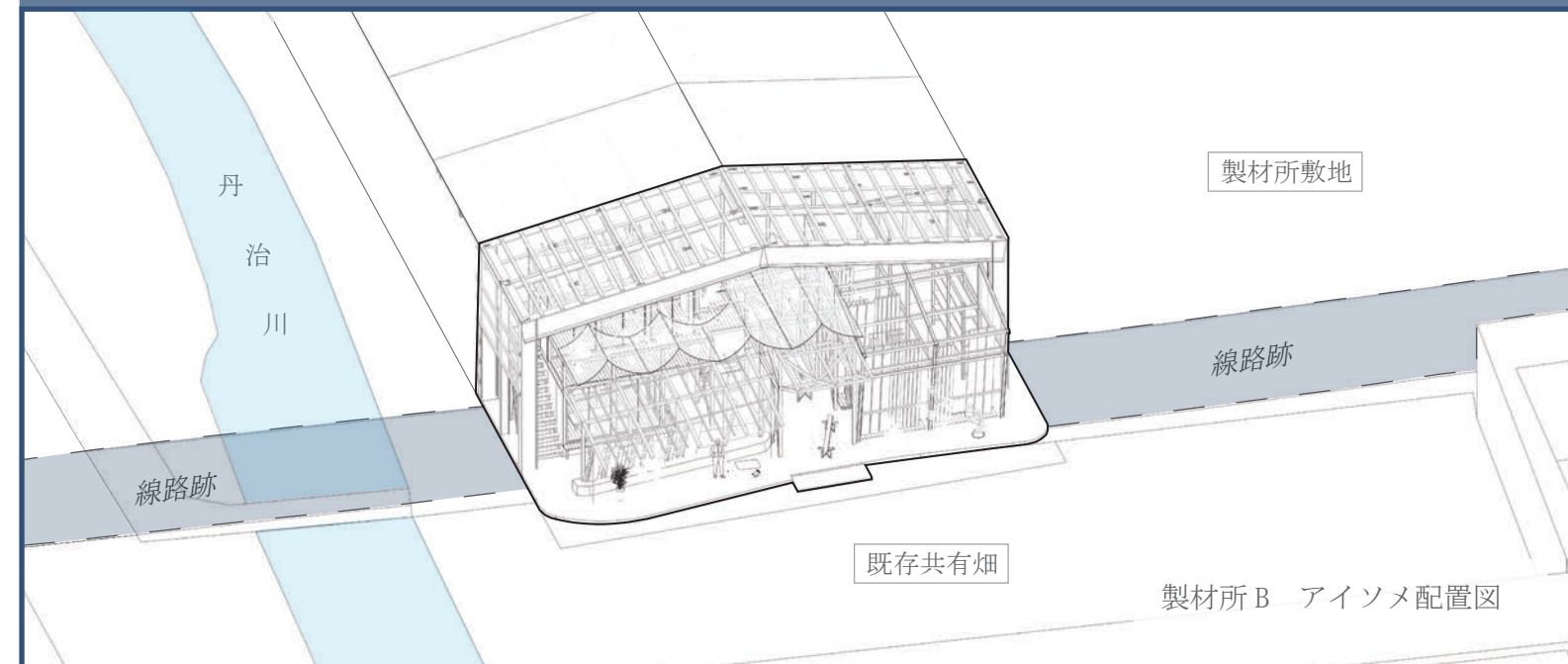
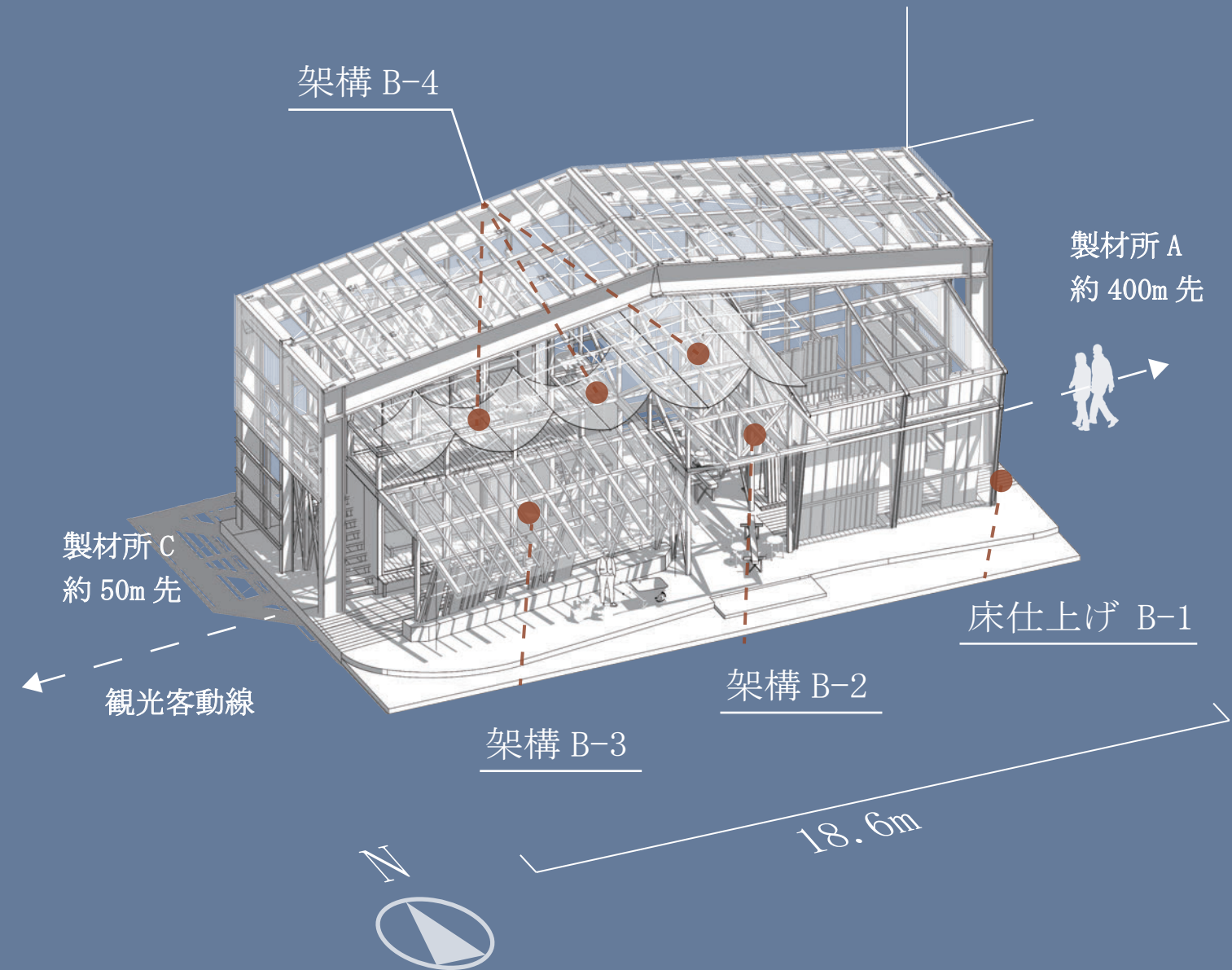


吉野川の遊船

戦前・戦後直後には吉野川の自然豊かな風景を楽しむための「遊船」と呼ばれる船が吉野川を賑わせていた。遊船の特徴である、船体上部に取り付けられた館部分を連続する布によって構成することにより、吉野川に賑やかにひしめき合っていた遊船の風景を表現する。

※架構の番号は観光客が実際に目にする順番と連動

製材所 B 詳細アイソメ図

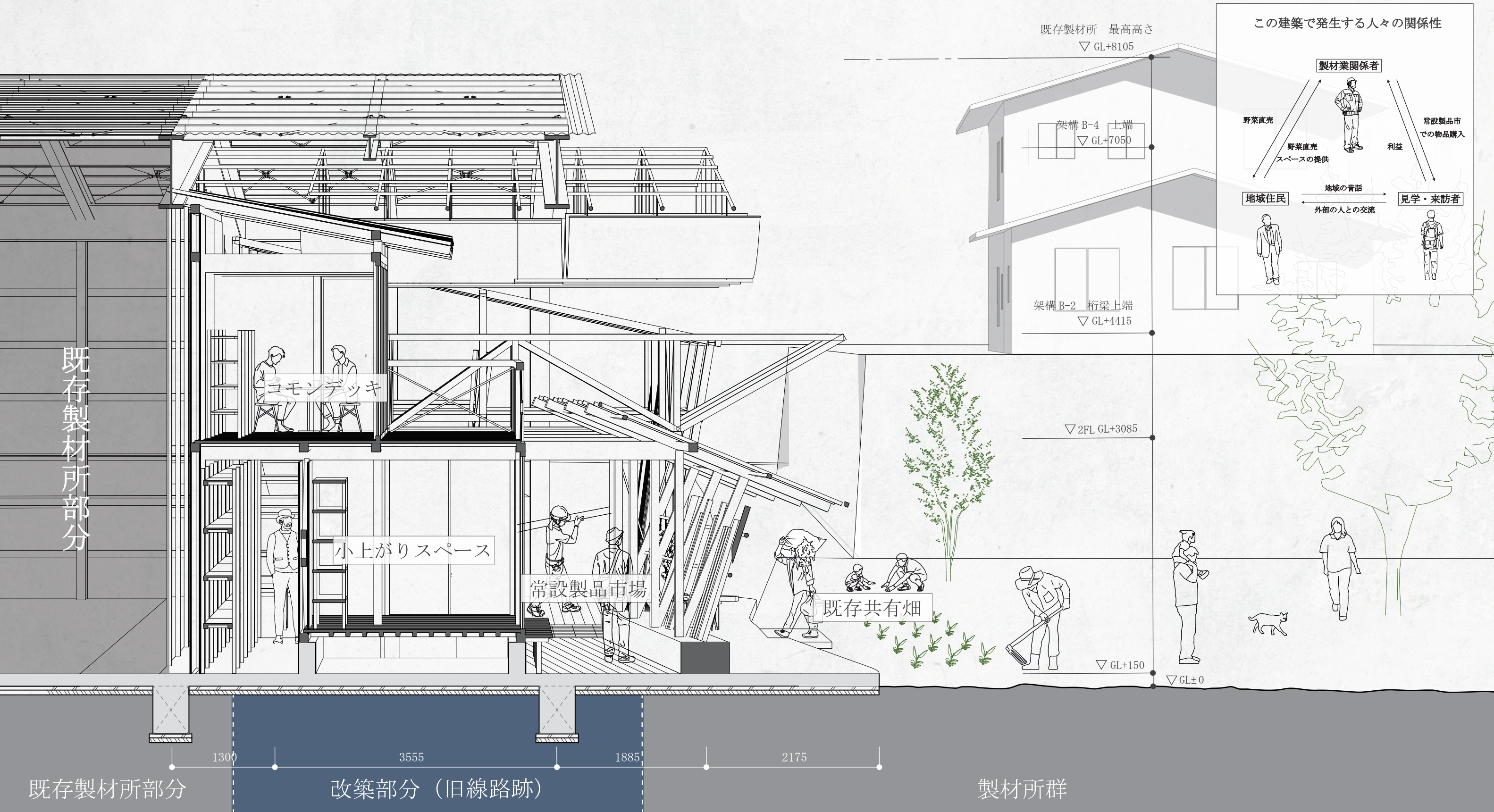


地域の活動が製材所内に浸透し形成される曖昧な境界

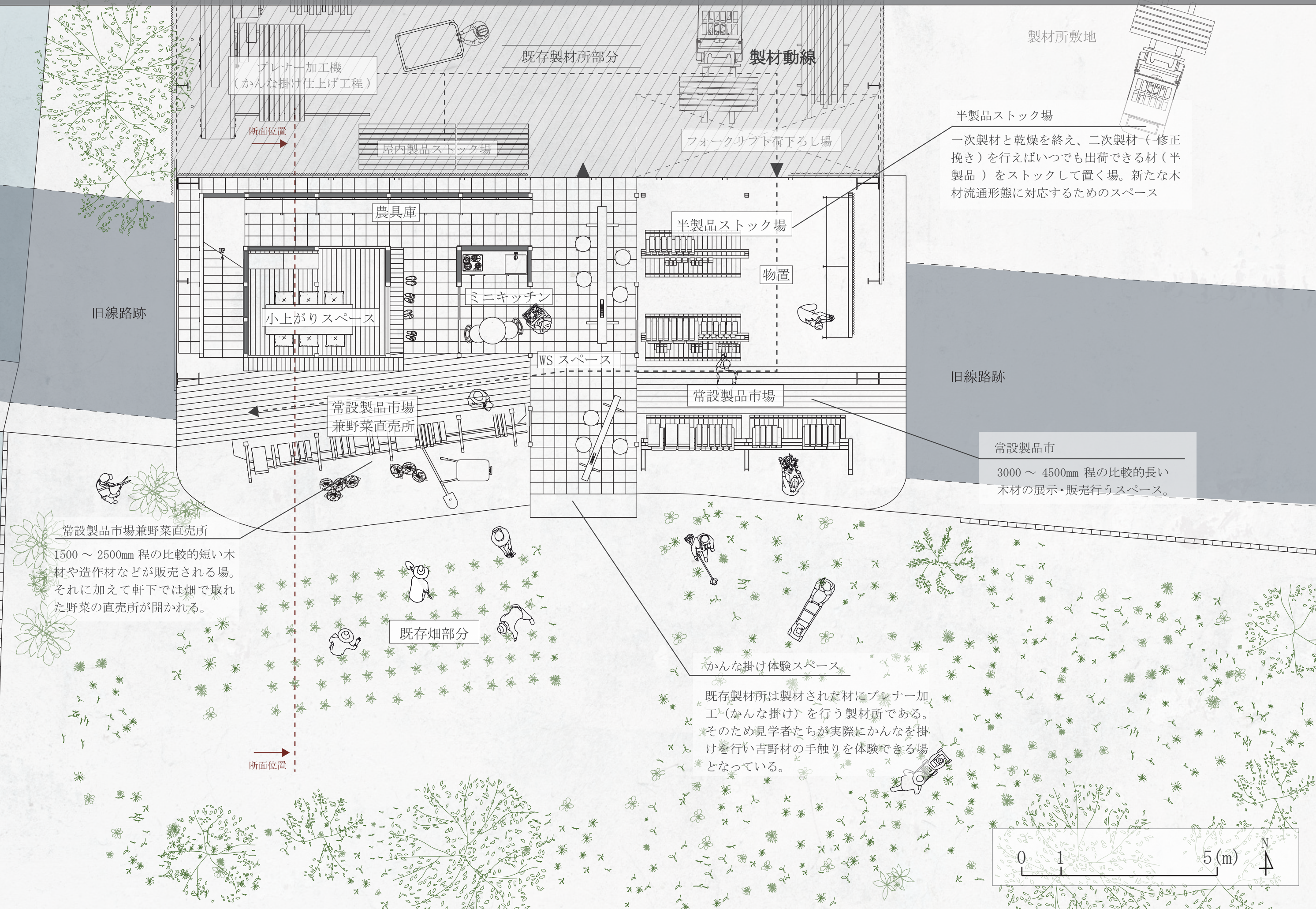
地域住民が共有で使用している畑に面した製材所である。もともと製材所 B は畑に面した南側に開口がほとんどなく、地域住民の活動領域と製材所は完全に分断されていた。そのため製材所の改築部分には畑で収穫した野菜を調理できるミニキッチンや常時開放している小上がりスペース・コモンデッキを設けることで、地域住民の活動が製材所内に浸透していくことを目指した。

吉野のコミュニティがホストとなり来訪者を迎える空間

畑では地域住民が日常的に農作業を行っているため、外部からの来訪者は自然と地域住民との交流が生まれる。そのため来訪者は地域の歴史や特徴についてパンフレットやカタログではなくコミュニティから直接学ぶことができる。製材関係者・地域住民・来訪者という今までは交わることのなかった3者の交流は地域コミュニティを再び活気づける火種となる。



13. 既存改修部分 B 配置図兼一階平面図 S=1/85



× 貯木池

既存製材所C（集成材工場）

吉野川を筏流しにより下って
きた原木は町に設けられた、

3つの貯木池

にストックされた。

池は多くの地元住民の手に
よって作られるとともに、
釣りをしたり、泳いだり
するなど

住民の生活の一部

であった。

そんな

生業と生活の結節点

であった貯木池の風景・記憶
を内包する。

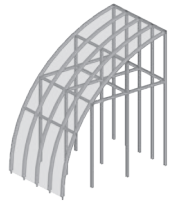


14. 製材所 C | アイソメ構成パース

isometric drawing

「貯木池」の風景から抽出したエレメント一覧

架構 C-1 / 貯木池での釣り



貯木池で釣りを楽しむ人々

貯木池は原木を貯蔵するだけでなく、日常的な人々の憩いの場としての役割を果たしていた。今回はその代表的な例である、人々が釣り糸を垂らす風景を曲面を基調とした架構により表現する。

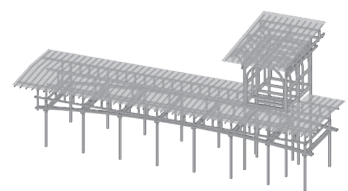
床仕上げ C-2 / 湾曲した貯木池



第一貯木池の写真

町には3つの貯木池があり、それぞれは空間的な問題から大きく湾曲している形状だった。湾曲した水盤を地面に配置することで当時の特徴的な貯木池の風景を表現する。

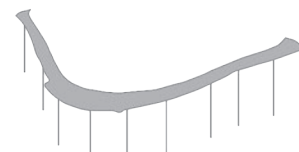
架構 C-3 / 材木橋と水門



当時の貯木池と水門

かつて貯木池には、池の中の水量を調整するための水門と一体化した「材木橋」と呼ばれる大きな橋が架けられていた。水平性を強調する木架構と木造アーチによって当時の風景を表現する。

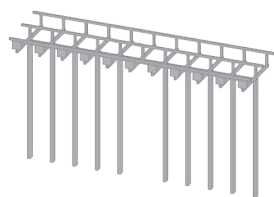
架構 C-4 / 吉野川分流



上空から見た吉野川分流

吉野川は貯木場付近で二股に分岐しており、そのうち南側を流れる河川（吉野川分流）から貯木池の水を引き込んだ。アルミ屋根により当時の吉野川分流の河道形状を表現する。

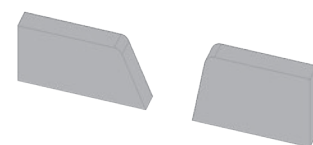
柱装飾 C-5 / 貯木池底固め



掛矢を用いた底固め

貯木池の建造は吉野地域発展の希望を背負った一大プロジェクトであり、工事には地域住民も多く参加した。今回は柱の装飾を掛矢を模した形状とすることで貯木場の固めの風景を表現する。

内壁 C-6 / 注水口

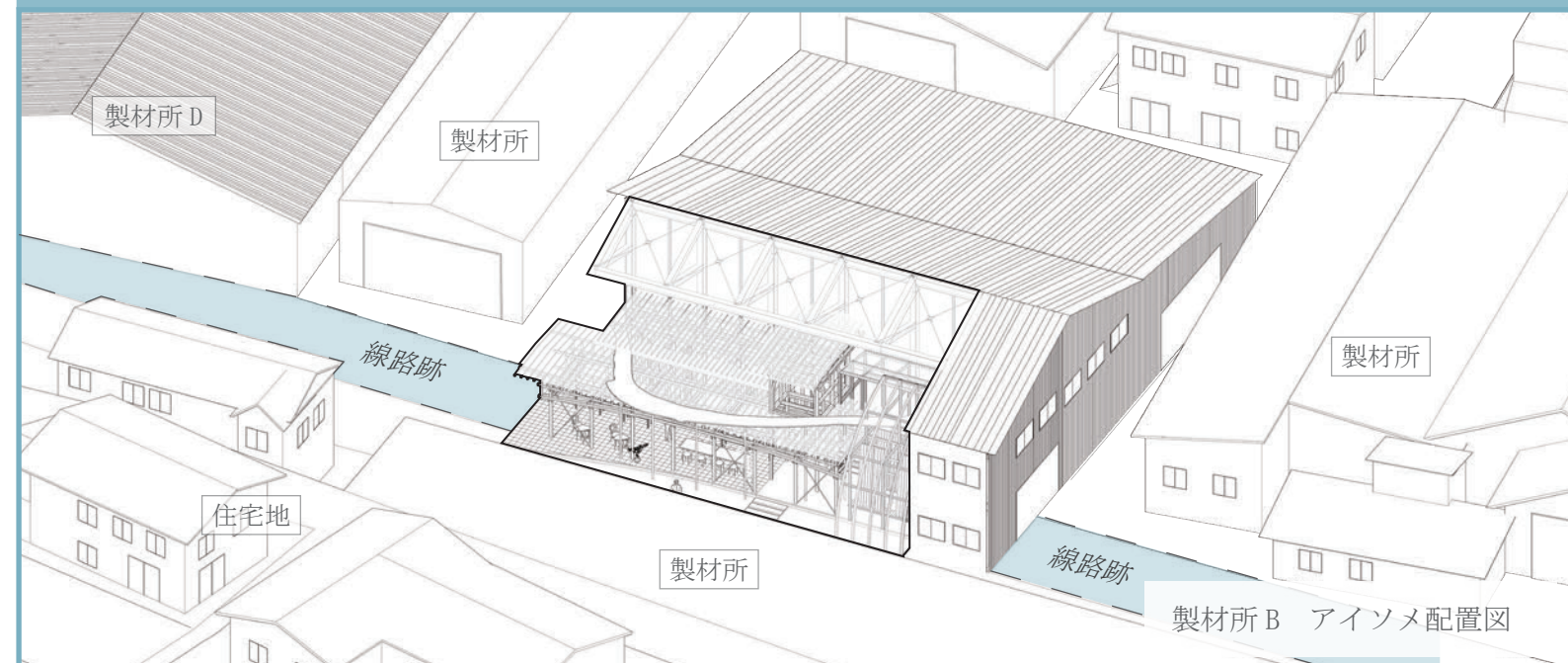
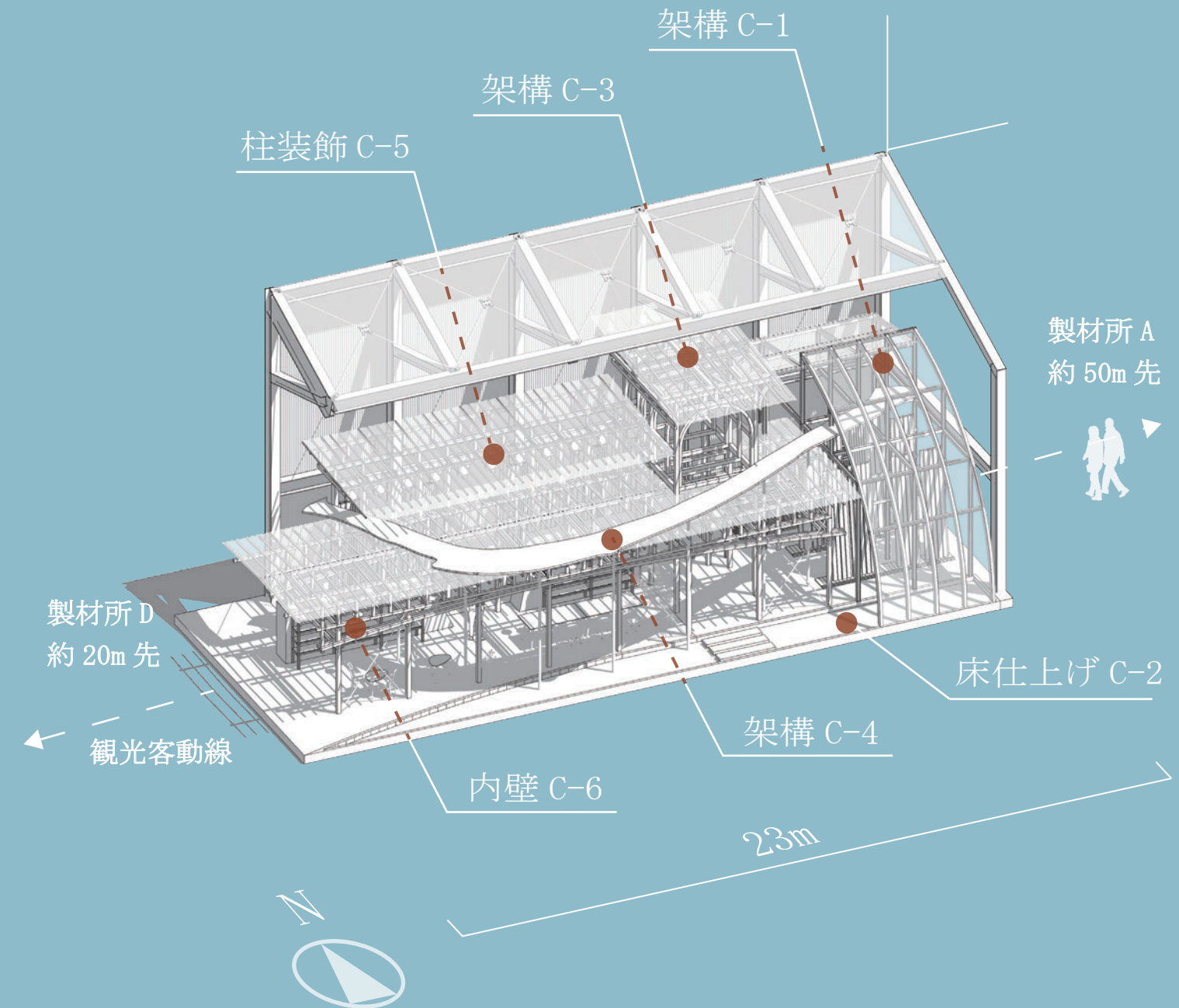


注水口に立つ人々

貯木池には吉野川分流以外に町の中央を流れる丹治川からも水の引き込みを行っており注水口が設けられていた。台形の内壁を二枚配置することで、当時の注水口を表現する。

※架構の番号は観光客が実際に目にする順番と連動

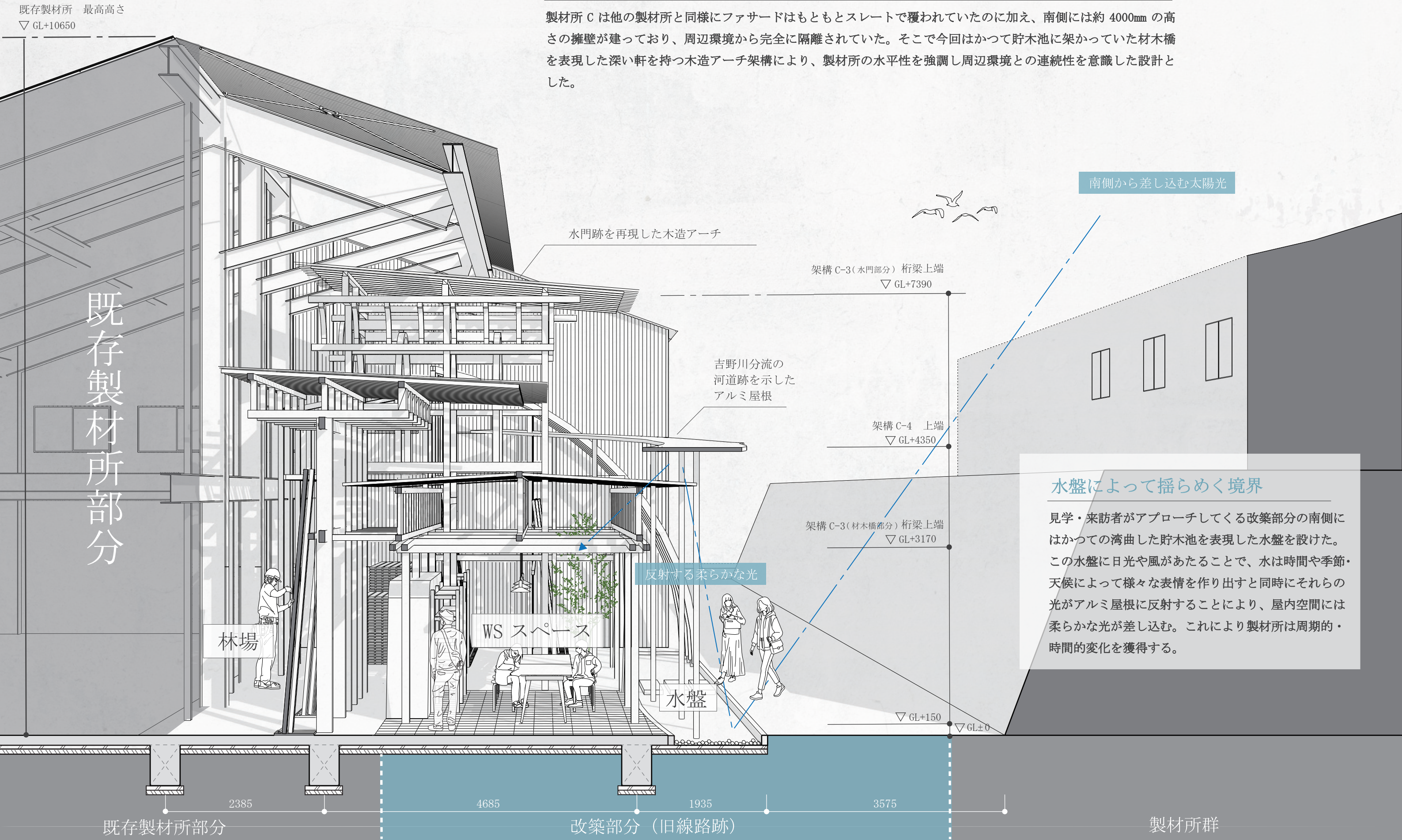
製材所 C 詳細アイソメ図



製材所 B アイソメ配置図

周辺環境をおおらかに巻き込む屋根架構

製材所 C は他の製材所と同様にファサードはもともとスレートで覆われていたのに加え、南側には約 4000mm の高さの擁壁が建っており、周辺環境から完全に隔離されていた。そこで今回はかつて貯木池に架かっていた材木橋を表現した深い軒を持つ木造アーチ架構により、製材所の水平性を強調し周辺環境との連続性を意識した設計とした。



南側から差し込む太陽光

水門跡を再現した木造アーチ

架構 C-3 (水門部分) 桁梁上端
▽ GL+7390

吉野川分流の
河道跡を示した
アルミ屋根

架構 C-4 上端
▽ GL+4350

架構 C-3 (材木橋部分) 桁梁上端
▽ GL+3170

反射する柔らかな光

水盤

▽ GL+150
▽ GL±0

水盤によって揺らめく境界

見学・来訪者がアプローチしてくる改築部分の南側にはかつての湾曲した貯木池を表現した水盤を設けた。この水盤に日光や風があたることで、水は時間や季節・天候によって様々な表情を作り出すと同時にそれらの光がアルミ屋根に反射することにより、屋内空間には柔らかな光が差し込む。これにより製材所は周期的・時間的変化を獲得する。

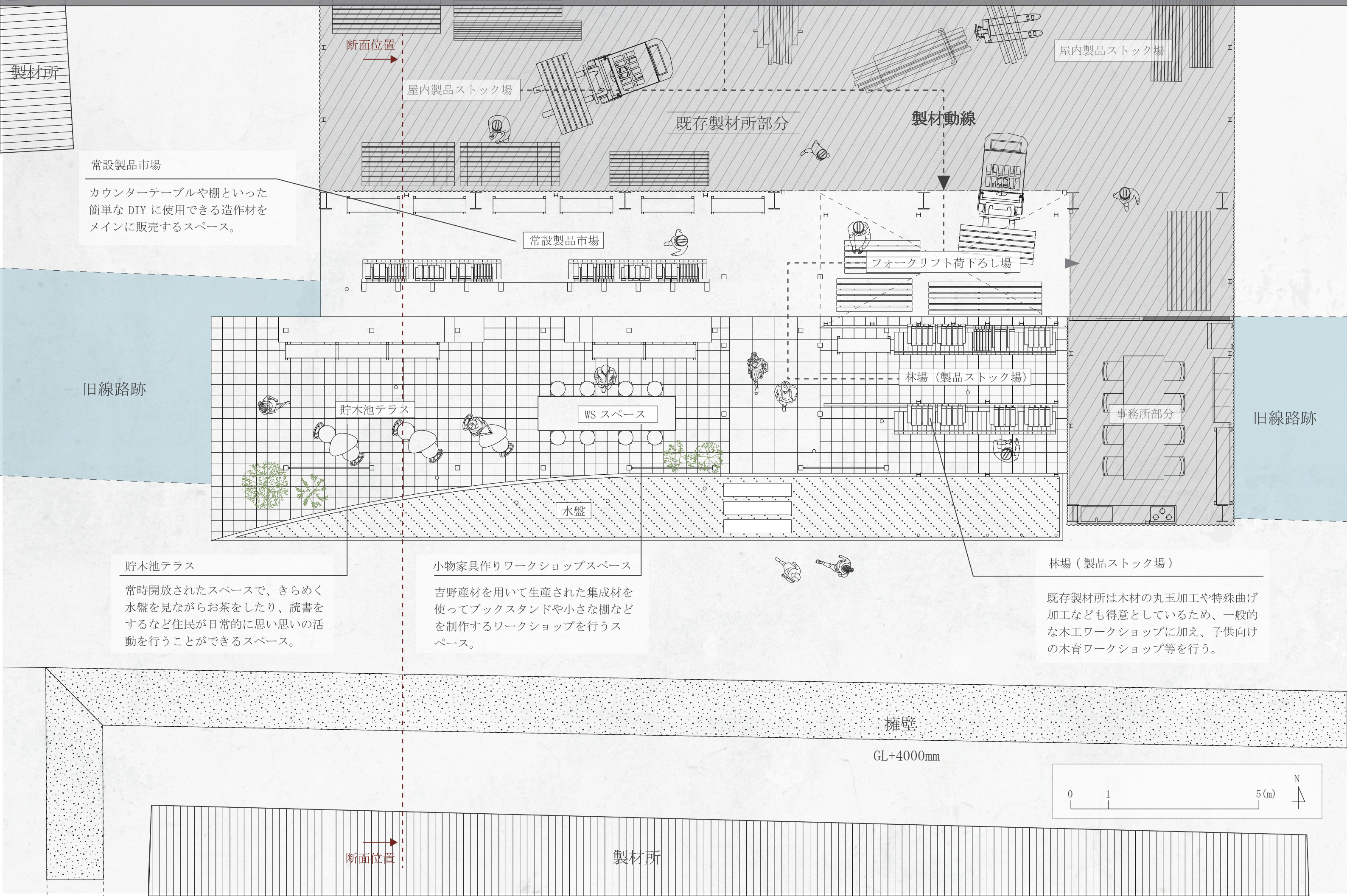
既存製材所部分

改築部分 (旧線路跡)

製材所群

16. 既存改修部分 C

配置図兼一階平面図 S=1/85



× 火

既存製材所D（杉・桧オイル抽出工場）

正月に各製材所で新たな区切りを迎えるため上げられる「お灯明」

先祖供養のための灯籠で埋め尽くされる

上市の灯籠流し

この町において火は過去と現在を媒介する存在であると同時に先人たちに祈りを捧げる特別な存在であった。

そんな特別な意味を持つ地域の「火」の風景を内包する。

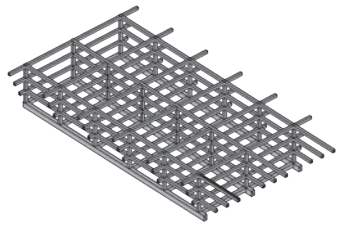


17. 製材所 D | アイソメ構成パース

isometric drawing

「火」の風景から抽出したエレメント一覧

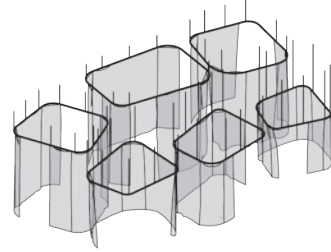
架構 D-1 / 採灯大護摩供



紫燈大護摩供

町の南側に位置する吉野山金峯山寺では毎年、護摩木を焚いて加持祈禱を密教の秘法である、紫燈大護摩供が行われる。これは人々の所願成就を祈願する伝統的な宗教行事である。今回は井の字型に組んだ木材により、儀式で焚き上げられる護摩壇を表現する。

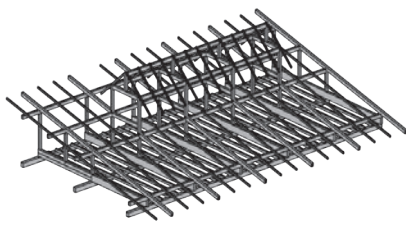
内部間仕切り D-2 / 上市灯籠流し



上市灯籠流し

貯木地域のすぐ北側を流れる吉野川では毎年夏に地元住民によって川を埋め尽くすほどの灯籠流しが行われる。これらは先祖への感謝・供養の思いを込めて流され、地域一体となって祈りを捧げる行事となっている。吊り下げられた四角形のカーテンにより灯籠の柔らかな雰囲気表現する。

架構 D-3 / 煙抜き



木造住宅の煙抜き

貯木地域を構成している大字の一つである上市は本善寺の寺内町として発展し、江戸時代には伊勢街道が通る町であった。そのなごりから上市周辺には現在も歴史的な木造住居が残っている。今回はその中でも煙を逃がすため屋根の頂上部に設けられた「越し屋根（煙出し）」を表現する。

架構 D-4 / 飯貝竹とんど

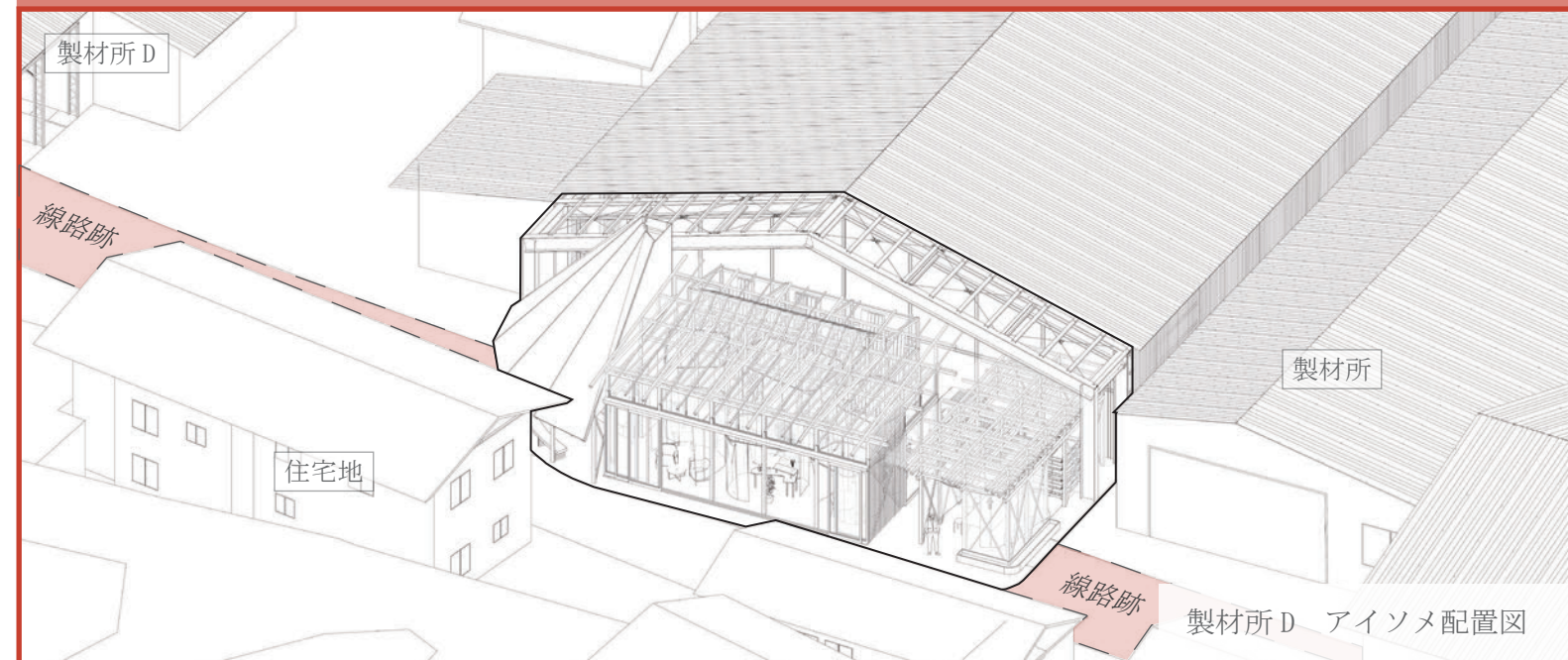
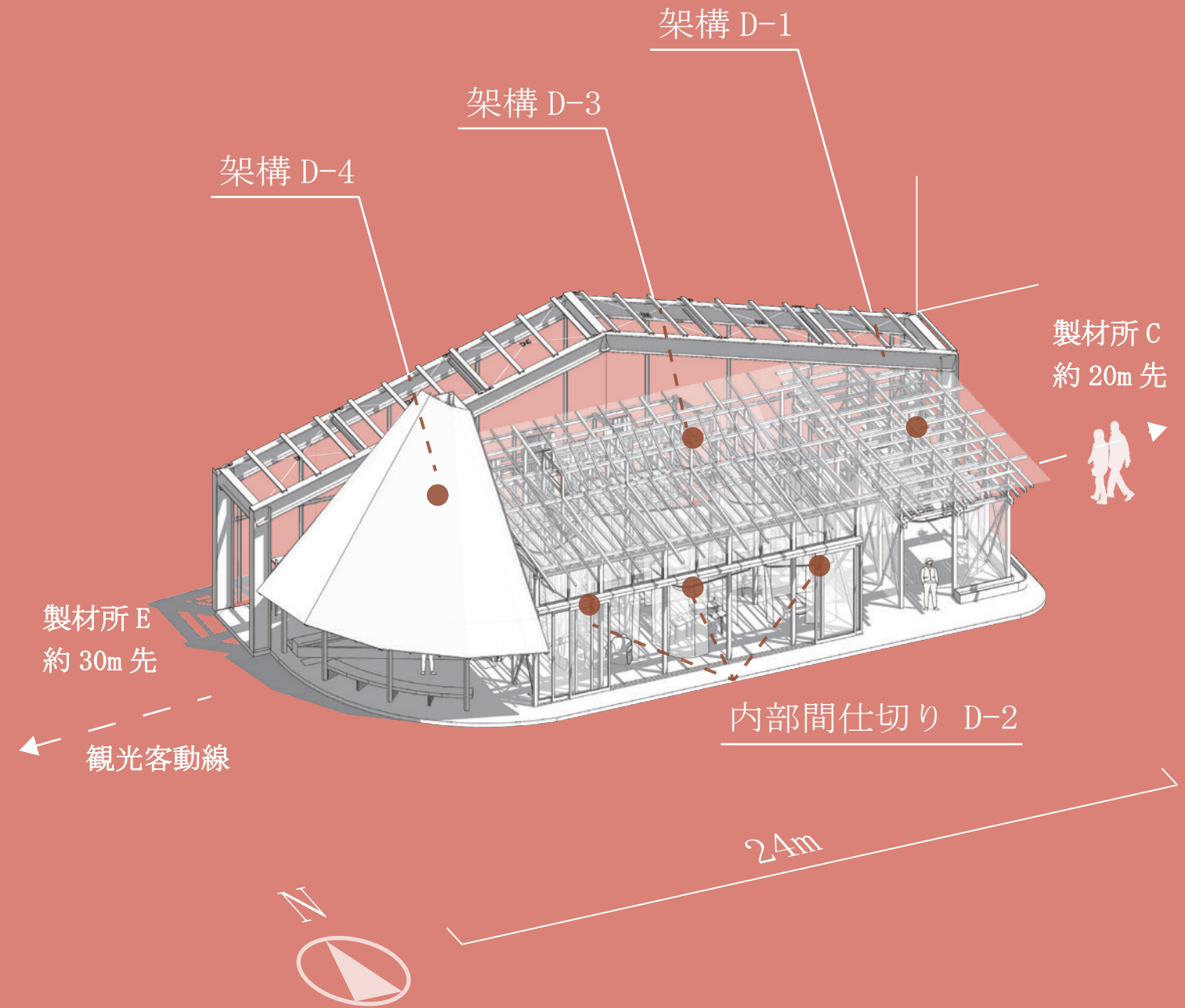


竹とんどの様子

遠い昔から吉野地方では竹と製材で出た端材を中心としてとんどを組み、正月に神様・仏様にお供えた正月飾り等をお焚き上げして一年の無病息災を祈る「竹とんど」が行われてきた。円錐形のようなとんど特有の垂直性の強い木架構を組むことにより地域の竹とんどの風景を表現する。

※架構の番号は観光客が実際に目にする順番と連動

製材所 D 詳細アイソメ図



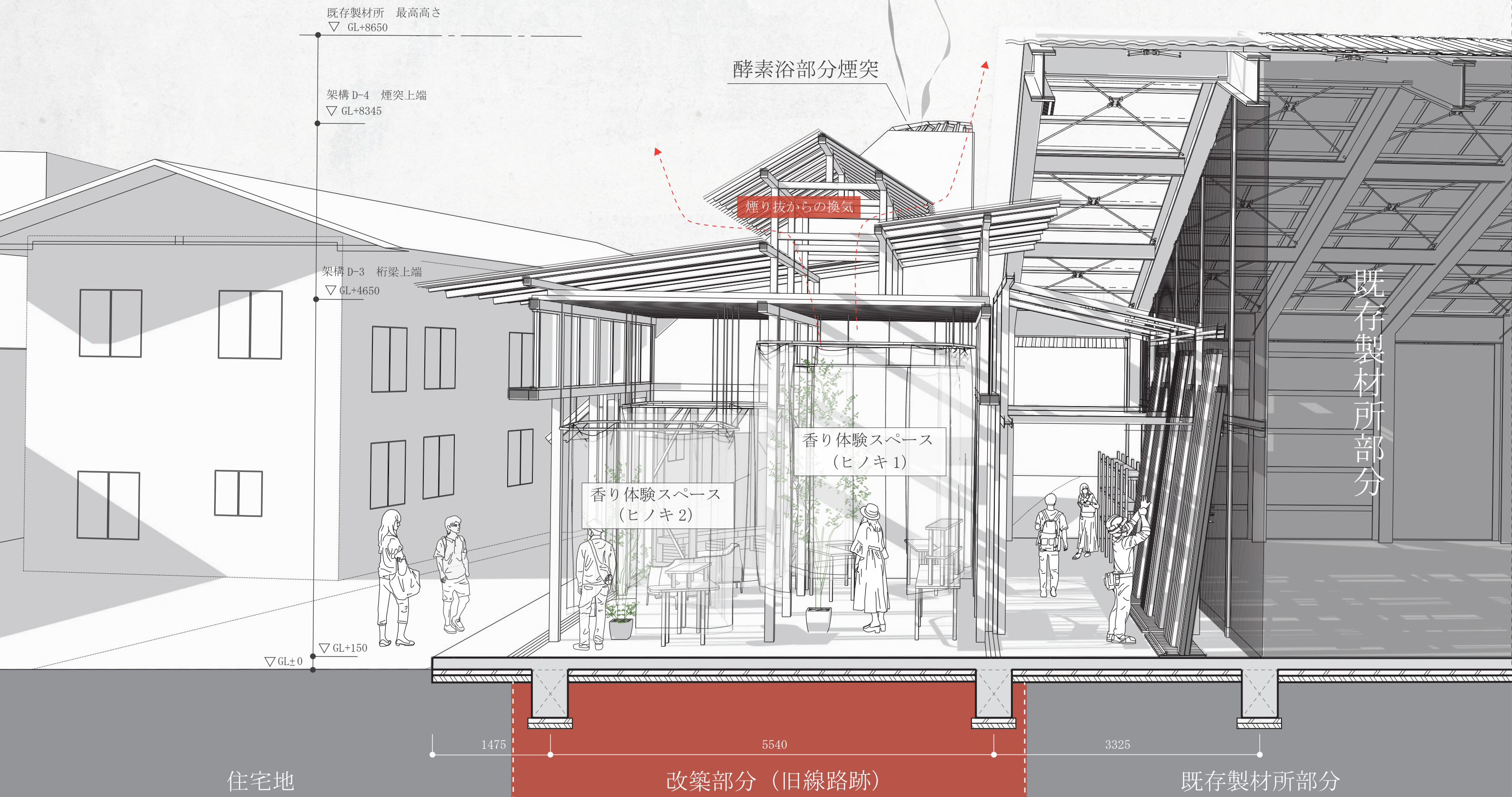
製材所 D アイソメ配置図

自然が生み出した香り・熱を享受する空間

製材所 D は杉・桧のおがくずなどから香料となるオイルを精製する製材所である。そのため建物内部は毎年地域で流される灯籠をモチーフにしたカーテンにより細かく分節され、それぞれの空間でそれぞれ異なる樹種の香りを体験することができるようになっている。またおがくずを発酵させた酵素浴の生産も製材所 D では行われており、竹とんどをモチーフにした円錐状の屋根の下では酵素足湯を体験できるようになっている。

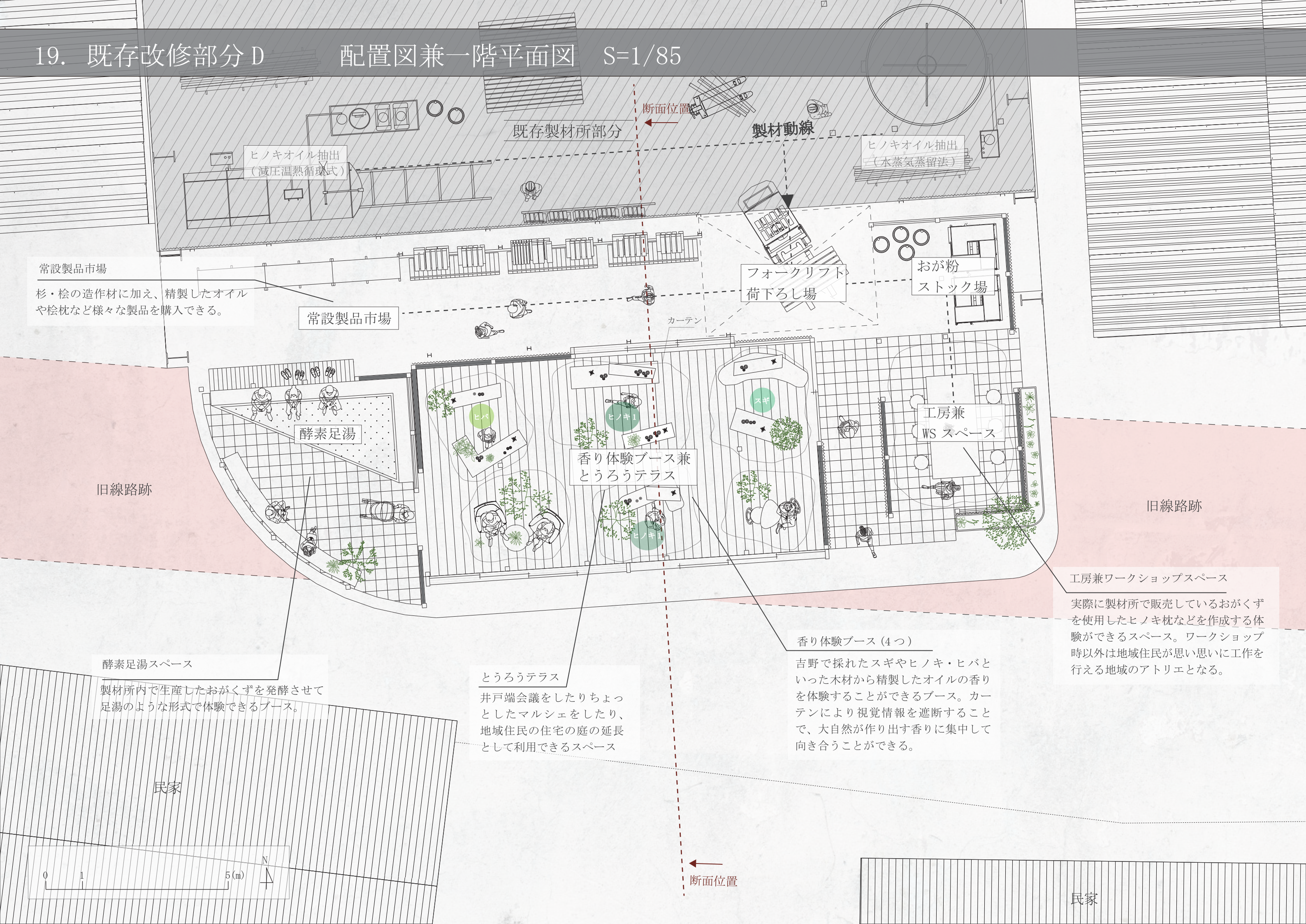
住宅と製材所をつなぐバッファー的建築

既存製材所は住宅のすぐ目の前に建っており、騒音的な問題などからファサードはスレートで覆われ住宅地と製材所は完全に分断されていた。今回建物内部に設けた灯籠型のカーテンは工場から住宅地への視線をカットすると同時に、住宅地と製材所の間に柔らかな中間領域を作り出す。



19. 既存改修部分 D

配置図兼一階平面図 S=1/85



常設製品市場

杉・桧の造作材に加え、精製したオイルや桧枕など様々な製品を購入できる。

常設製品市場

旧線路跡

旧線路跡

酵素足湯スペース

製材所内で生産したおがくずを発酵させて足湯のような形式で体験できるブース。

とうろうテラス

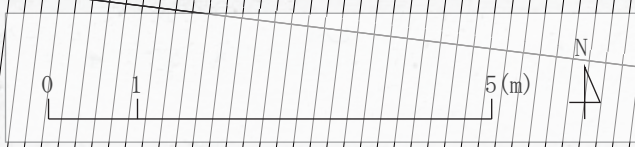
井戸端会議をしたりちょっとしたマルシェをしたり、地域住民の住宅の庭の延長として利用できるスペース

香り体験ブース (4つ)

吉野で採れたスギやヒノキ・ヒバといった木材から精製したオイルの香りを体験することができるブース。カーテンにより視覚情報を遮断することで、大自然が作り出す香りに集中して向き合うことができる。

工房兼ワークショップスペース

実際に製材所で販売しているおがくずを使用したヒノキ枕などを作成する体験ができるスペース。ワークショップ時以外は地域住民が思い思いに工作を行える地域のアトリエとなる。



民家

× 祈り

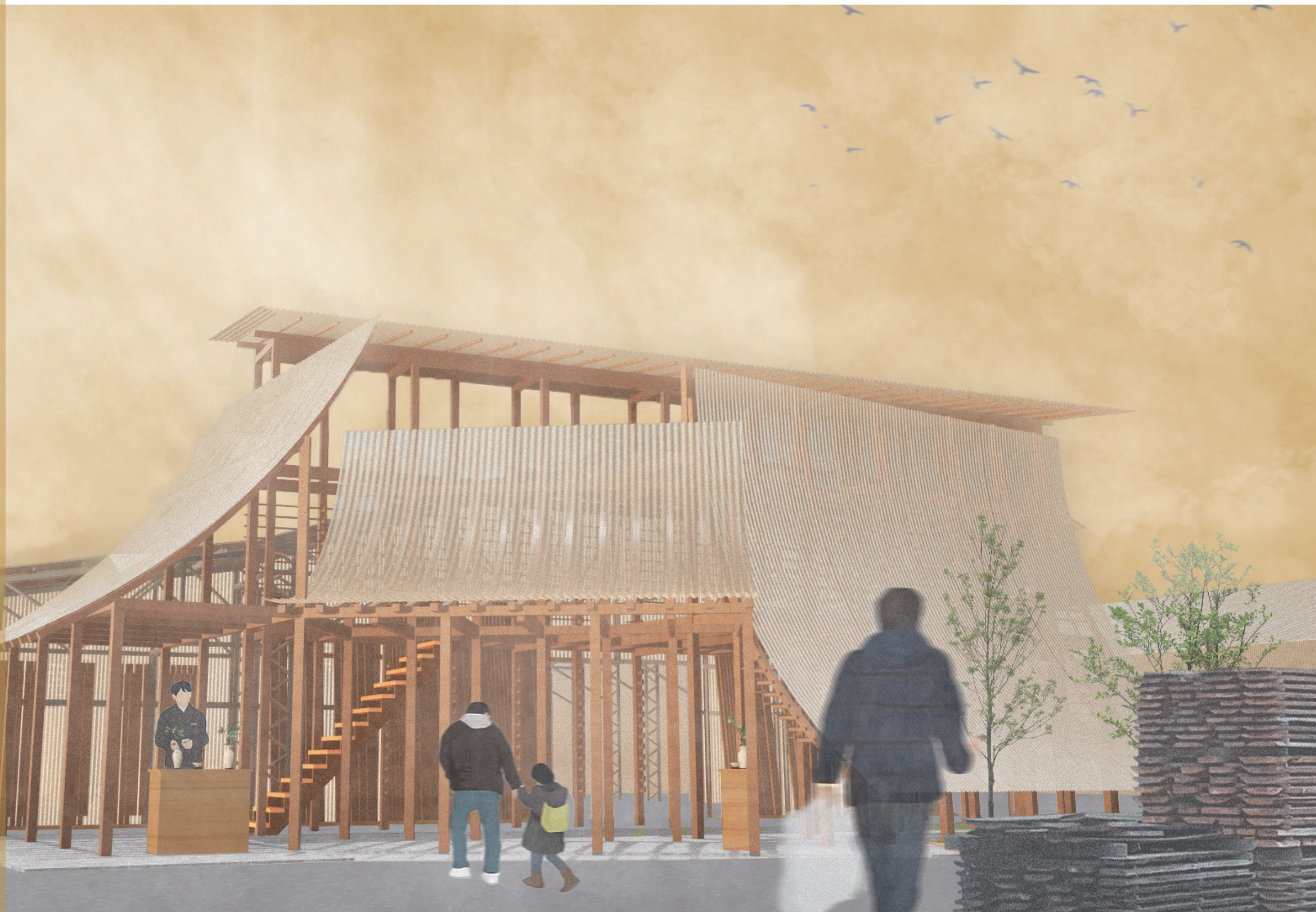
既存製材所E（フローリング材製材工場）

吉野では古くから、住み着いた土地の秀麗な山を
神と崇めた。

そのため吉野を構成する大字ごとに様々な山の神が祠などに祀られている。

しかし近年では過疎高齢化によりそれぞれの地域の祠へ詣でる機会も
失われつつある。

そんな今だからこそ、製材所が立ち並ぶこの地から山へと直接祈りを捧げる場を設ける。



20. 製材所 E | アイソメ構成パース

isometric drawing

伝統的吉野林業地 3 村から抽出した軸線一覧

架構 E-2 (-10.6°) / 東吉野村



東吉野村の山岳信仰

東吉野村平野では上出、中出、下出垣内の三ヶ所、他に二ヶ所でそれぞれ山の神を祀られている。御供はネムの木で巧みに作られた山の神の道具やアズキ・洗米などである。

架構 E-3 (26.9°) / 川上村



川上村の山岳信仰

川上村では、山の神として磐長姫尊（イワナガヒメノミコト）という女神様を祀っている。1月、6月、11月の7日は山の神の日と定められ、人が山に立ち入ることは禁じられている。

架構 E-4 (82.7°) / 黒滝村

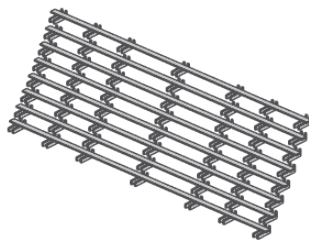


黒滝村の山岳信仰

黒滝村では各集落に一つ祠があり、林業の神が丁寧に祀られている。祭日は12月7日（または12月の第1日曜日）で林業者だけでなく、集落を挙げて祭事を執り行う。

「地域の製材」「吉野の山々」の風景から抽出したエレメント一覧

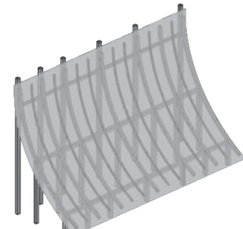
内壁 E-1 / 栈積みの様子



修羅出しの様子

吉野貯木地域では吉野杉の特徴である色艶を活かすため栈と木材を交互に積んだ栈積みを行い、屋外の土場で約半年から1年ほど天日により天然乾燥を行う。この風景は昔から変わらない吉野貯木特有の風景である。今回は短い材と長い材を等間隔に組むことで、栈積みの風景を表現した。

架構 E1 ~ E3 / 吉野の山の急峻な斜面

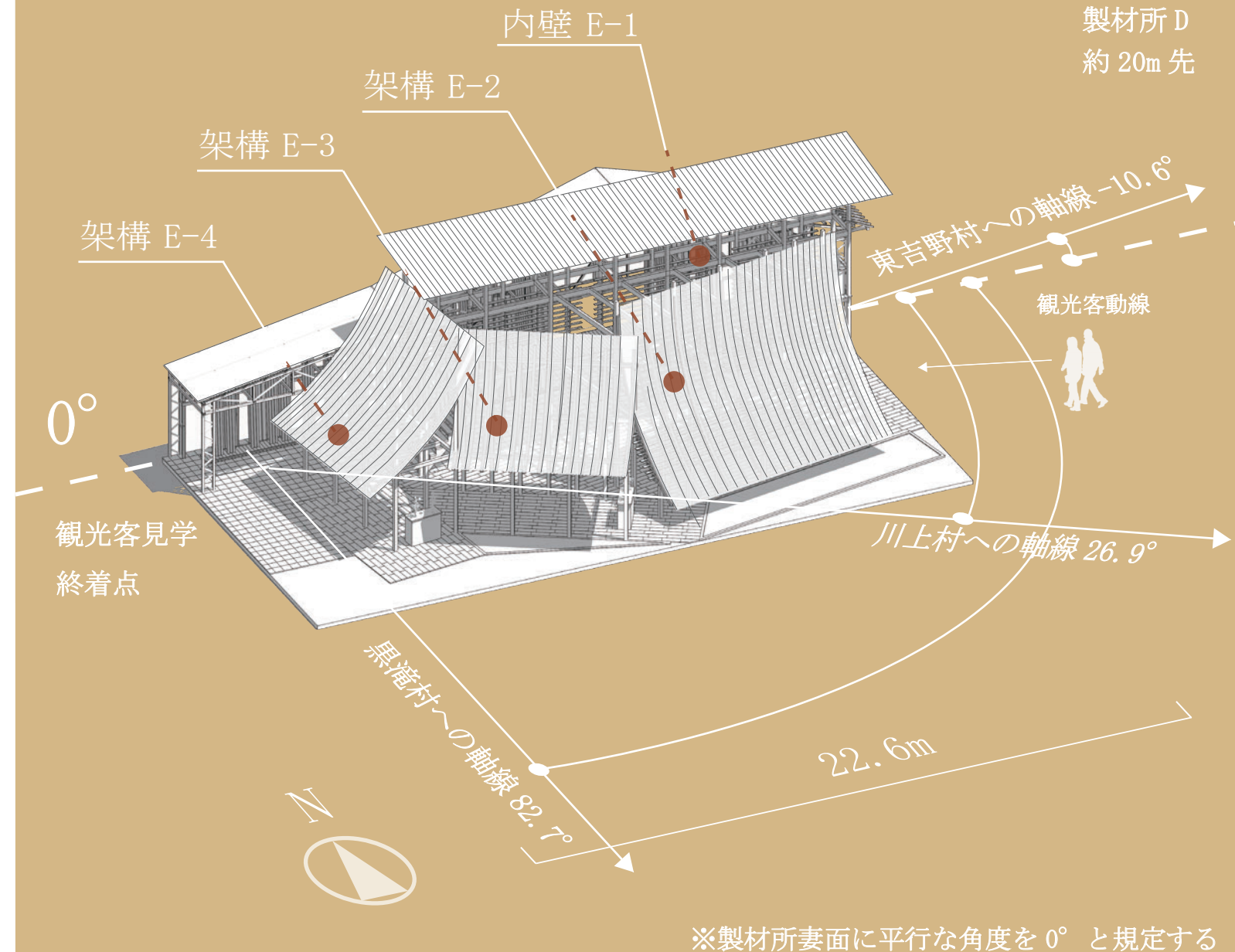


吉野の山の急峻な斜面

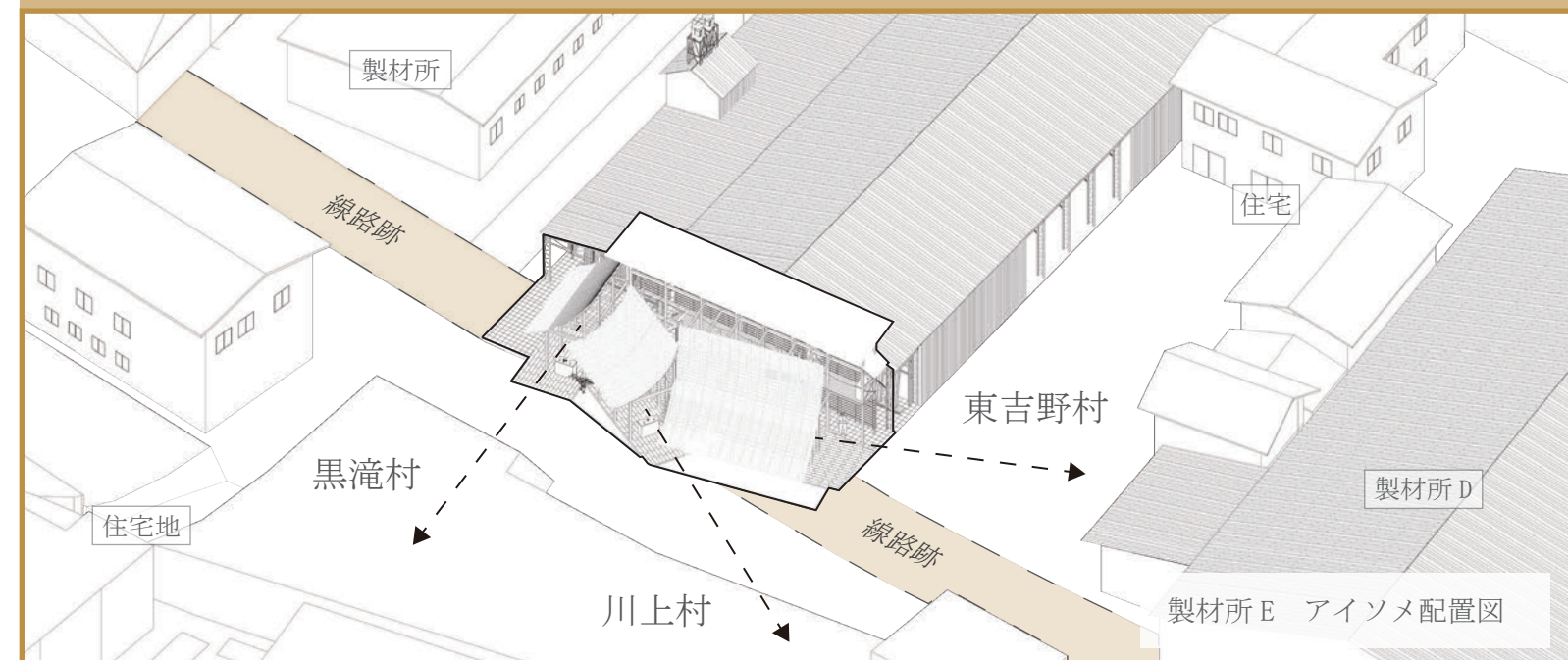
吉野林業が代々行われてきた吉野の山の特徴はその急峻な斜面である。その険しすぎる傾斜ゆえ、倒木や乾燥、搬出方法などは吉野地域独自の方法が数多く発展してきた。今回は曲げ加工を用いた集成材を組み合わせることで架構を形成。急峻な吉野の斜面の風景を表現した。

※架構の番号は観光客が実際に目にする順番と連動

製材所 E 詳細アイソメ図



※製材所妻面に平行な角度を 0° と規定する



製材所 E アイソメ配置図

21. 既存改修部分 E

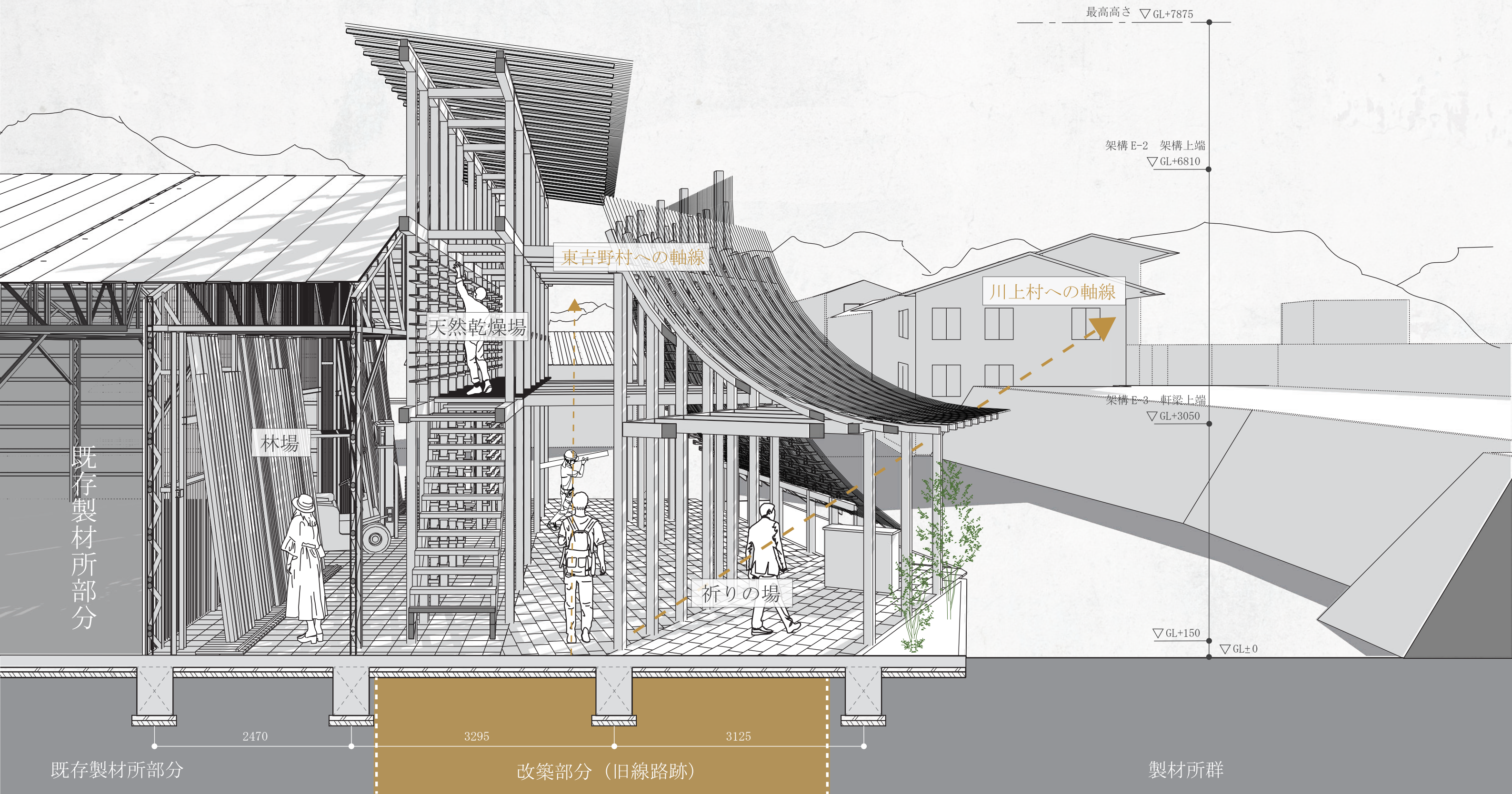
短手断面詳細図 S=1/45

失われゆく山への感謝・祈りを再確認する場へ

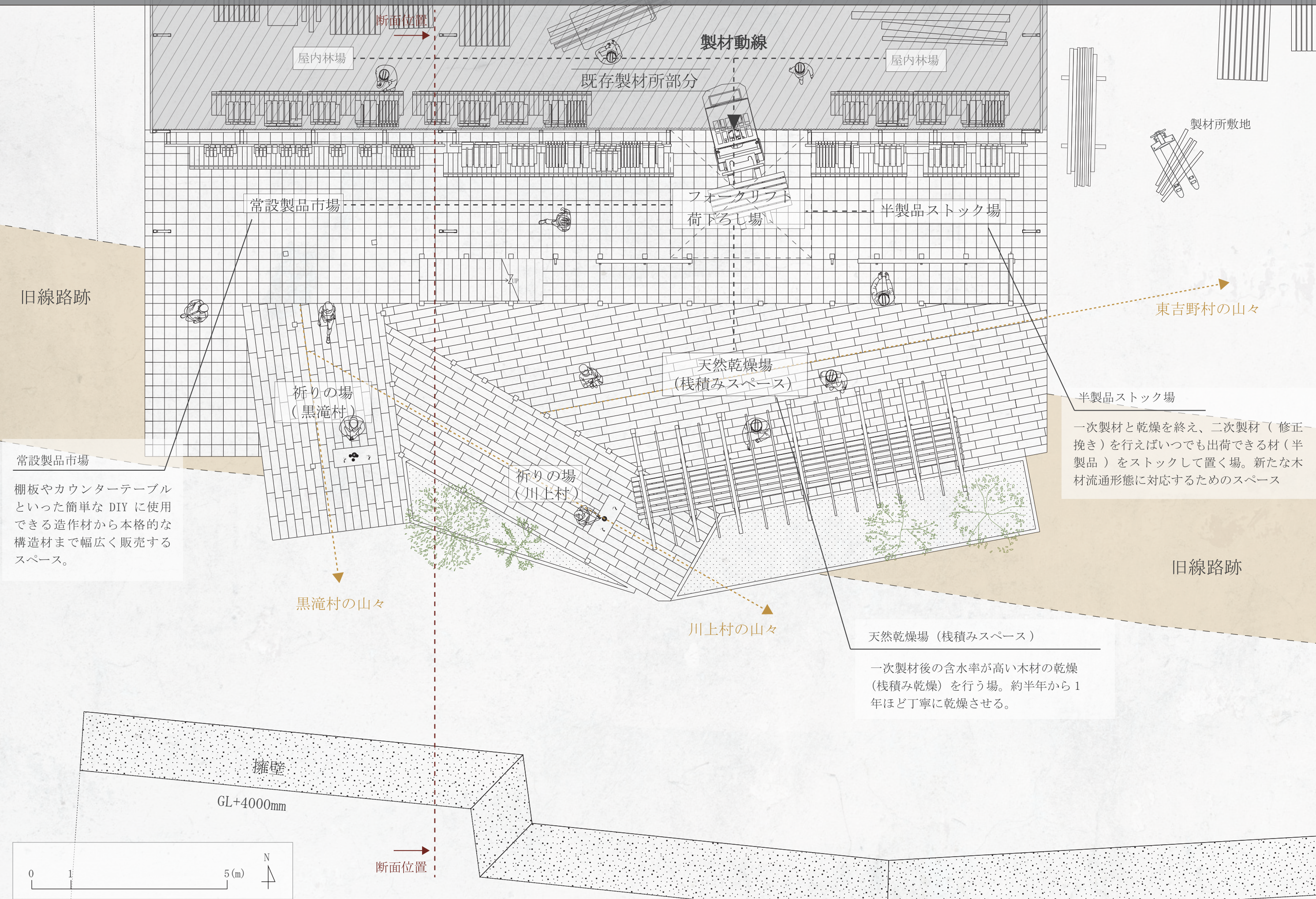
吉野では古くから、住み着いた土地の秀麗な山を神と崇めるなど山岳信仰が盛んであった。そのため吉野を構成する大字にはそれぞれ山の神が祠に祀られ大切に維持管理されてきた。しかし近年では過疎高齢化によりそれぞれの地域の祠の維持管理が難しくなりつつある他、詣でる機会も失われつつある。そこで本改築では吉野林業発祥の地であり伝統的な林業地として知られる 3 村（東吉野村・川上村・黒滝村）の山々への軸線を可視化し、この場所から奥へ奥へと連なる山々へと感謝・祈りを捧げる空間を計画する。

生業と祈りが交差する空間

内部空間は天日によって乾燥を行う地域特有の風景である「栈積み」をモチーフとした架構が広がり、フローリング材が乾燥させられる。架構の隙間からは光が差し込み吉野の山中に在るような感覚を来訪者に与える。3 村への軸線を表す架構の終着点にはそれぞれの地域の山の神を祀る祠が設けられ、地域住民が日常的に祈りを捧げる場となる。



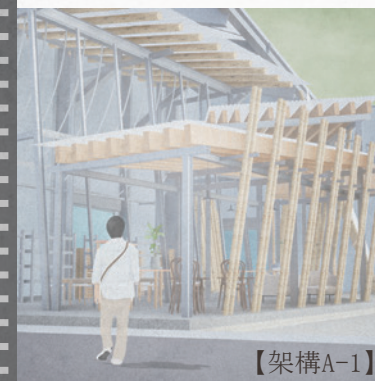
22. 既存改修部分 E 配置図兼一階平面図 S=1/85



既存製材所 A × 吉野の山々

scene01

3つの連続する屋根架構



scene02

丸太屋根と斜めに架かる紐



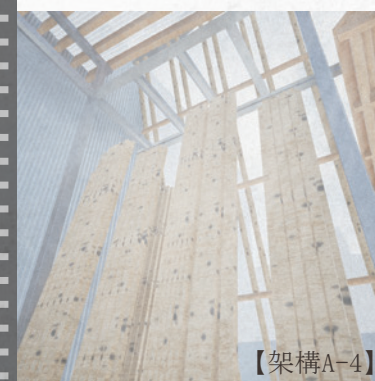
scene03

三角の丸太屋根



scene04

丸太による大架構

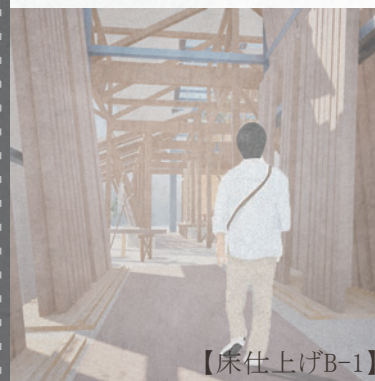


110m

既存製材所 B × 吉野川

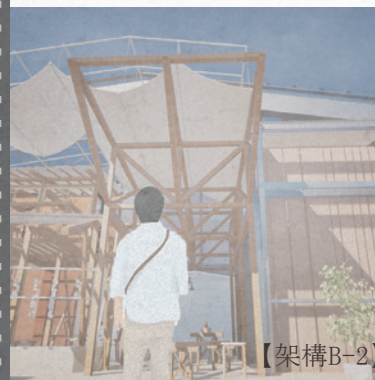
scene05

平行に連続した床材



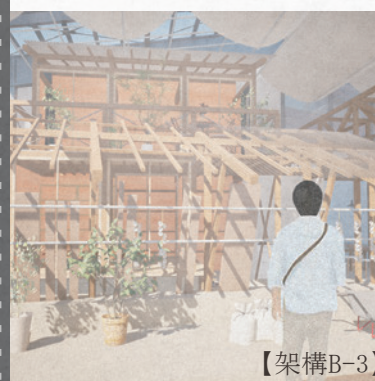
scene06

鉛直材付きワーレントラス



scene07

二段の屋根架構



scene08

連続する膜天井



640m

既存製材所 C × 貯木池

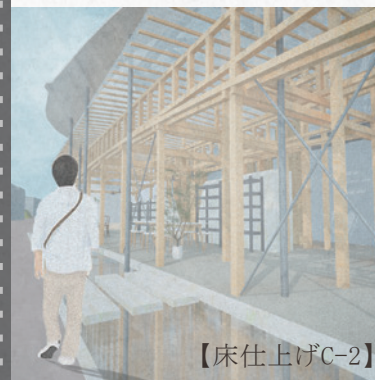
scene09

緩やかな弧を描く架構



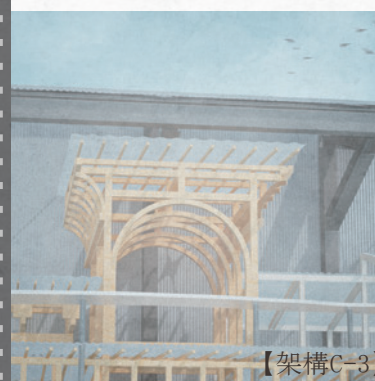
scene10

湾曲した水盤



scene11

木造アーチ



scene12

いびつな形状のアルミ屋根



710m

既存製材所 D × 火

scene13

井の字型に組まれた架構



scene14

四角形のカーテン



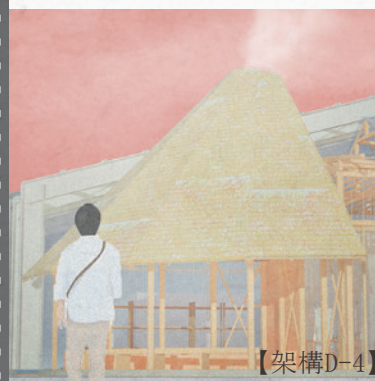
scene15

煙出しが付いた屋根



scene16

円錐型の煙突



750m

既存製材所 E × 祈り

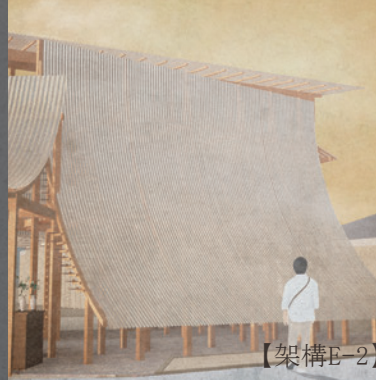
scene17

等間隔に干された木材



scene18

垂直性の強い曲面架構



scene19

急勾配の曲面加工



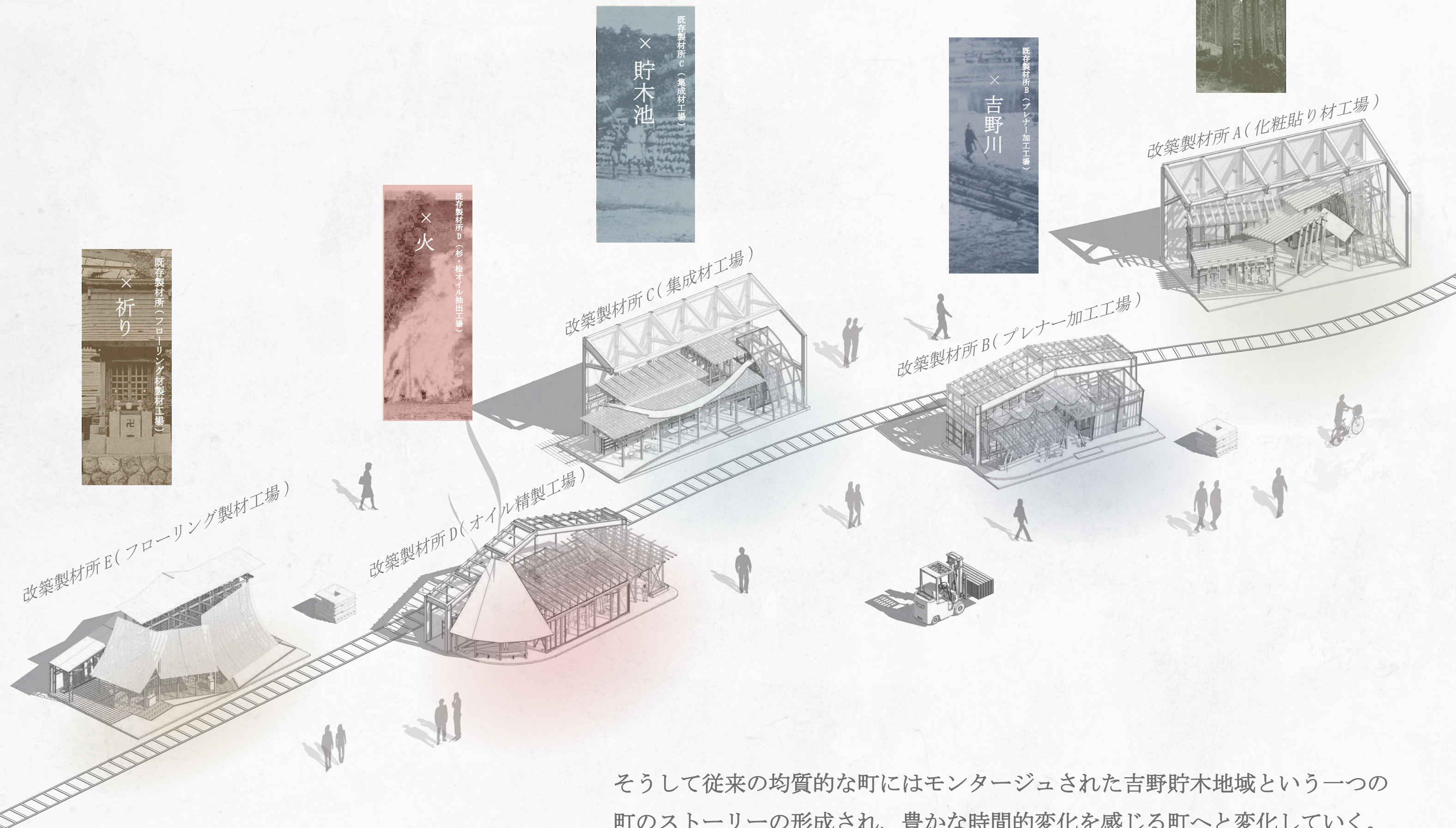
scene20

緩勾配の屋根架構



800m

最終的に地域の象徴的なインフラであった引き込み線跡には地域の記憶と深く結びつくテーマによって改築された製材所が立ち並ぶ。



そうして従来の均質的な町にはモンタージュされた吉野貯木地域という一つの町のストーリーの形成され、豊かな時間的変化を感じる町へと変化していく。